
黄昏のオオカミ—The Twilight of Xenoatla—

pandi剛種

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄昏のオオカミ―The Twilight of Xenota
tla―

【Nコード】

N4601BA

【作者名】

pand i 剛種

【あらすじ】

あらすじ：この世界は終わりを迎えようとしていた。『異人』化と呼ばれる現象は約九十億人いた人口を約一億人にまで減らし十年だった今でも神は『人』を人間と異人に選別した。俺は獣人、異人のなれの果て、或いは成りそこない、人の意思を持ち獣の体を持ち、仲間と共に『人』に争いを挑む者。

めに戦うの？」

「ねえユウ。君は何のた

わからない。この戦いの果てに何があるかはわからない。ただ、別に戦いに勝利するつもりはない、差別をなくしたいわけじゃない。あの日起きた夕暮れの地獄を終わらせるため、仲間をこの地獄から救うため、俺はこの道を歩いていく。この作品は最終話投稿時点から七日目に削除します

一話目

戦い続けて既に十年が過ぎた。

いつ終わるともわからない小競り合いの連続。

仲間は疲弊の色こそ見せないものの、刻苦は時の流れと共に確実に空気に滑り込み、体をむしばんでいた。

時が過ぎれすぎるほどに、仲間は減っていく。

少しずつ死んでいく。

狙撃されるもの。

流れ弾に当たるもの。

失血死。

服毒死。

そして、自殺——

仲間は少しずつ減っていった。

ソレと共に、道も遠のいていった。

誰かがやらなければならなかった。

道を開く者が必要だった。

この道を、たった一人で歩く人間が必要だった。

——行こう。

この道の先に未来があると言うのなら、この先に行き戦いを終わらせることができるのなら。

一步を踏み出せば、砂塵が舞い上がり夕焼けを霞ませる。

空はどんよりとしてやがて街が黄昏に沈む時に差しかかる。

そこは東京。

かつて俺達が平和に過ごした街、地下には迷路の如き線路と通路

が走り、地上には巨大なビルがいつくも立ち並ぶ。

今は、それらが全てカモフラージュ。

都庁ビルを中心に建物は巨大な遮蔽物になり、地下道は俺達の基地への道を繋ぎ、敵を遮る。

そこは東京。

巨大な戦場となった、廃墟。今は亡き世界の中心。

そして、俺達の故郷。

——行こう。

黄昏の夕闇に、広大な戦場が沈んでいく。

もうすぐあちこちでサーチライトが照らされて、街は夜の戦いへと色を変えていくだろう。

夕闇を縫い、俺達は再び地面を蹴り上げる。

銃は片手に、防弾スーツを身につけ、通信デバイスを口元に添え、灰の空気を吸い込み、巨大な棺桶に身を包む。

六メートル強のパワードスーツ、徹甲弾を装備したガトリングを担ぎ、脚部には対地中用パルスバスターを装備。肩には予備弾薬を担ぎ、モニターの向こうに宵に濡れた戦場を捉える。

皆、一斉に操作レバーを握りしめる——

東京が夜に沈んでいく。

暗闇に染まった夜闇を無数のスポットライトが照らし、至る所で暗闇がかき消される。

不意に、夜風に硝煙が混ざり、突き出た鼻につく。

程なく遠くで対装甲ライフルの射撃音が尖った耳に響き、小さく息を吸い込み、脚のレバーを踏みこむ。

『——先発隊が敵とぶつかりました』

強化パワードスーツが動き、それだけで地面が揺れる。

戦いの始まりだ。

明日に繋がるかもしれない、それともこれで終わりかもしれない。
第二次強襲作戦。

朝が始まるまでに、決着を付けよう——

「ガングレド、皆の命を預ける」

『はい、隊長』

「行こう——送電施設を今日こそ落とす」

夜の闇の中、俺達は駆ける。

これで終わることを信じ、明日へ命を繋げられることを信じ、地面を踏みこみ、強く歩いていく。

そして、目指すは東京都庁。

巨大なビルの中へ——

黄昏のオオカミ | The Twilight of Xen

O a t l a

二話目

十年前、この世界の片隅で異常な出来事が起きた。

ある日。突然、何の前触れも前兆も、科学的予見も起こる余地もなく。

人が、水風船のように膨らみ、そして弾けた。

街の真ん中で鮮血が人々に振りかかり、やがて騒動が東京の街の片隅で起きた。

ただそれは、一時的な猟奇的な殺人事件だと思われた。

だけど、半年後、同じことが起きた。

一つだけじゃない。

渋谷。

人が行きかう、街の真ん中で三十の人間が場所を違えて一斉に破裂すると言ふ事が起きた。

同じく騒動になった。

ただこれはここで終わらなかった。

その後、別の人間が、人の姿をやめ、異形の化け物へと姿を変えた。

それが、最初の『異人』だった。

写真で見たただだが、壮絶なものだ——もげた首の断面から無数の触手がイソギンチャクのように伸び、肩からは動物の頭が迫り出していた。股の間からは大量の毛がワサワサと生えて、イカのようなだった。

背中には翼が生え、胸からは同じ動物の顔が出ていた。

まさに——化け物だった。

その人間はすぐさまに捕らえられ、解剖され——程なくして、

解剖をする余裕がなくなった。

当然だ、全世界で同じようなことが起きたのだから。

街中で同じように、化け物へと変化する人間が増えてきて、普通の人間を殺していく事が起きた。

街が血の海に沈んだ。

そんな事が、世界中で起きた。

子ども、老人、男女関係なく、無差別に、平等に全ての人間がそうなる可能性を、神は与えた。

そんな状況を誰も取り締まらなかった。

政府という器には、既に化け物どもが跋扈していたから。

ありえなかった。

そんなあり得ない事が科学的に何の前兆もなく起きるわけがない。だけど、何一つ手掛かりが見つかることなく、その変異現象は世界でワクチンの無いインフルエンザの様に増えていった。

結果、九十億人いた人類のうち、八十億人が『化け物』に、そして残りが人間とに振り分けられた

2056年、二月十四日。

夕日の眩しい、午後四時二十分。

神が与えたもう選別の時——その日、人は生きるべき命と、死すべき命に選別された。

皆、死んでいった。

残ったのは、普通の肌をした『人間』と獣のような頭と毛むくじやらの肌をした、理性の残った『獣人』の二種類。

今は、その十億人のうち、残った二種類の人間が、互いに戦い、或いは狩りをしているだけだった。

獣と人が戦い、或いは異人と戦う日々。

文明はすでに退廃し、残ったのはいくつもの兵器と人だけ。

そして——異人と魔法。

荒廃した世界が、この青空の下に広がっていた。

この世界は、もうすぐ終わろうとしていた。

だけどあの日の夕焼けは、
未だに続いていた

三話目

2066年、十二月二日。

東京都心。

メグロ区画。

崩れ落ちた廃ビルがいくつも並び、かつて人が住んでいたであろう廃屋がひしめく居住区画。

人の気配はなく、街の明かり一つない夜の暗闇が周囲に広がる。瓦礫が縦横に走る道に無数に走り、横倒しに崩れたビルが大きく高速道路を横倒しに倒していた。

路地裏には野良猫など動物は消え、いるのは無数の触手の生えた肉塊の骸。

『異人』の死体が暗闇の中、至る所に転がり、或いはビルの窓からダラリとだらしなく上体を垂らしていた。

五つの首を持ち、二つに裂けた胴をもった化け物。

七つの目があり、口腔の中に無数の顔を迫り出す、異形の生物が暗闇広がるメグロの街に転がっていた。

そんな死体をつつく鳥、蠅一匹すら現れず、腐ることすらなく暗闇に肉の塊が佇む。

ただ、四十万が夜闇に広がる――

――ドオオオンッ

ビルの合間から空へと立ち上る黒い土煙。

ズルリ……

衝撃に『異人』の死体が不意にビルの窓から零れおちる。

ビルとビルの間から迸る閃光。

闇を塗りつぶす光は絶え間なくフラッシュし、暗闇の中にドラムのような重たく激しい破裂音が走る。

ビルに反響する銃撃音——白い硝煙がビルの合間から昇る。
ズウウウンツ

地面に重たく響く衝撃音。

粉塵を大量に撒き散らし、崩れかけた廃ビルが中から折れて崩れる中、暗闇に飛び上がる大きな影があった。

六メートル超の巨体。

スラリとした四肢。

装甲は闇に溶け込むように、黒を基調にし、頭部は対照的に白光を放つアイサイトが二つ、そして補助サイトアイが胸に一つ。

脚部には補助ロケットスラスターが装甲の内側から展開。

噴射口の光は脚部から零れるままに、無骨で滑らかな黒の装甲を照らす。

四機の両腕にそれぞれ、狙撃銃が計二丁、突撃小銃一丁、大型ガトリングキャノンを装備し、背部の弾薬パックを装備。

閃光を放つビルの合間から飛び退くままに、近くのビルに飛び退くままに、硝煙の幕の向こうに四機の巨人が装備を構える。

『……今だ、撃て！』

——重たい発射音。

地面にアンカーを突き刺し固定した脚部がトリガーを引くままに、大きく後ずさりコンクリートが決れる。

マズルブレーキから煙が立ち上り、閃光と共に対強化装甲用徹甲弾が二発同時に飛び出し硝煙の幕を晴らす。

そして眼下から噴き上がる閃光と弾丸の雨をかくぐり、敵の影を捉える——

——ドオオオンツ

重たい衝撃音と共に、同じような大きさの機体の胸元を貫いては、僅かに浮いた上体が下半身から千切れた。

空中をクルクルと回転して夜天に向かって弧を描く上体。

ソレと共にビルの上から降り注ぐように、対装甲ガトリングランチャーの雨がビルの間にいた七機の弾幕を押し返す。

大きく上下する八連バレル。

ガトリングガンを担いで弾幕を張り続け、残った二機は後ずさる敵機を捉えて正確に胸元を撃ち抜く。

暗闇を裂く断続的な閃光の中、敵の数が五機、四機と減っていく

「アトリア！そろそろ引くぞ！」

「後十秒！」

「増援を引つ張って隊長の下に帰る気か！？」

——遠くから噴き上がる新たな光の雨。

刹那、ガトリングを背負っていた一機の頭部を掠める新たな弾幕に、四機は暗闇の中アイサイトを細めた。

そこには新たに五機、六メートル超の巨人が暗闇の中、無数の廃ビルの間を縫い煙を引いてやってきた。

——日本連邦政府所属アーマードエグザス・エルザ。

大型ロボットとして八年前、アトモス社との共同開発により旧日本政府により作られた第二期エグザスを戦闘用に改良、人が乗れるように生産された機械。

分類は大型パワードスーツで操縦者の動きに忠実に追随する事で柔軟な動きと分厚い装甲による防御力を可能とし、小型核反応エンジンによる動力によりより重たいものが持てる代物だ。

エルザはそのエグザスの強化型であり、この日本を統治する連邦政府が所有する最新鋭現行機。

そんな最新鋭機が、目の前まで来ている——

「——渋いな……逃げるに逃げれん」

「狙い撃つ……！」

「敵の方が多い時はどうすると教えられた……！」

「……遮蔽物を利用する」

「あまり戦線は下げられんが——撒くぞ」

脚部固定用アンカーが外れ、装備した武装の重さに僅かに前のめりに浮く巨体。

夜闇の中、噴き上がる弾幕を背に、四機の巨人はソレゾれ足元のビルを離れ、再び細く入り組んだビルの合間へと飛び降りた。

バキリツと罅を走らせ割れるアスファルト。

巨体は僅かに地面に沈めば、脚部装甲から補助ブースターを迫り出し、足部裏面からキャタピラが迫り出した。

土煙を上げ、地面に沿って走行を始める四機。

その後ろから直ぐさま、アサルトライフルの強化弾が雨のように降り注ぎ、ジグザグに走る四機の装甲を掠める。

『グウウ……！』

『エトナ！弾薬バックパックを切り離せ！』

『これだけで何人敵が殺せると思ってるのよ！うち貧乏なのよ！』

『お前が死んでどうなるものかよ！』

『うっさい走れ！』

ドオンッ

逃走をしながら、周囲の狭いビルの壁に装甲を擦られ、ガトリングを持った一機が大勢を崩す。

膝を僅かに折り、脚部が地面を擦り走行スピードが落ち、巨体が地面に手をつく。

そして回転して滑りながら周囲の壁にぶつかり、黒い巨人が尻もちをつきながら、動きを止める。

損傷した頭部のアイサイトを動かしながら、閃光を上げ弾丸を巻きながら近づいてくるエルザが見える。

グッとガトリングの砲台を持ち上げては敵を狙う。

トリガーを引き絞る――

『撃ち方やめ――』

――聞こえてくる低い声。

ヒュオオオオッ

闇を切る鋭い音。

瞬間、尻もちをついた黒い巨人の頭上、夜の空をよぎり、巨大な影が後方から飛び出してきた。

噴き上がる背部と脚部の補助推進スラスタ―。

スポットライトに照らされる黒い装甲。

滑らかな躯体は、柔軟な動きを空中に見せながらビルの間から飛び上がり、眼下に五機のエルザを捉える。

腕の装甲から迫り出す長いナイフ。

スラスタ―を切り自由落下するままに、左腕内蔵ブレードが一機のエルザへと向けられる。

真っ赤にぎらつく二つのアイサイトが見下ろすままに暗闇にぎらつく――

――ビルの間から立ち上る土煙。

路地内をくまなく広がる土煙の中、エルザの胸部装甲に縦に走り、火花を散らしながら機体が仰け反る。

そして暗闇と砂塵に視界が遮られ、関節が空回りながら、後ずさる――

『――引いてもらおうか』

ヒュンッ

夜風を切る鋭い音。

砂塵を払い、周囲の建物の壁に真一文字に斬痕を浮かべ、暗闇から又ウと姿を現す、長い銀髪。

追随するように噴き上がる衝撃波に晴れる土煙。

衝撃波に吹き飛ぶビルを横目に、前のめりに身体を屈め、斬痕に沿って崩れ落ちるエルザの前に黒い装甲の巨人が立っていた。

真っ赤な目が、黒い血飛沫を上げながら崩れる敵機の下半身の向こうに、四機の気配を捉える。

カシャリと小さな音を立てて走行の中に内蔵ブレードが収まる――
『エトナ。少し下がれ――ガングレド、戦線を構築するぞ』

ドスンッとアスファルトにめり込む脚部。

ソレと共に脚部の滑らかな黒い装甲が内側から開いていき、中から迫り出す巨大な杭が地面に突き刺さった。

キィイイインッ

微振動を上げて甲高い音を震わせる八つのステーキ。

四機のエルザが眼前で携行武器を構え、黒き巨人はグッと前のめりに身体を屈める。

紅い眼光を闇に浮かべる――

『広域パルスバスター始動』

――半径二キロの高周波攻撃。

『行くぞ、ガングレド』

立ち上る膨大な土煙。

甲高い空気の悲鳴と共に旧居住区画一体を覆う程に、地面が激しく割れ、砂塵が地面奥深くから噴き上がった。

音を立てて崩れ落ちる一体の無数の建物。

地面がクレーター状に窪んでいき、七機のエルザがよろめきながら、崩れた地面の中へと引きずられていく。

メグロ一体を覆うスポットライトを遮る程に夜空へと粉塵が立ち

上る――

『撃て！』

――粉塵を晴らす程の激しい銃撃。

混乱する七機のエルザを捉え、暗闇を裂く閃光と共に、激しい弾幕が津波のごとく押し寄せてきた。

対装甲ライフル弾の群れが一直線に走り、夜の闇をよぎり、遙か後方から放物線描いて溜弾が土煙に吸い込まれる。

爆風がさらなる粉塵を形作り、後ずさる七機のエルザの四肢が降り注ぐ弾丸にバラバラになっていく。

ドスンッ

降り注ぐ溜弾が一機の胸部コックピットに直撃。

より激しい爆炎が浅いクレーター状の更地に噴き上がる中、紅い瞳をした黒き巨人は火柱に戦線を後退する。

肩には友軍機。ガトリングを引きずり、よろよろ歩く仲間を紅い瞳に捉える。

『エトナ……無茶をする』

『隊長……すいません』

『銃は人を殺すためにあるんじゃない』

『銃は、相手の動きを封じるために使う——生きているにせよ、死んでいるにせよ、相手に撃つことに意味がある……』

『危なくなったら直ぐに武器を捨てる。……よく生きた、エトナ』

『隊長……』

『——ガングレド、エトナ機を回収、そっちに戻る』

やがて浅いクレーター状の戦場を離れ、二機のパワードスーツは再びビルとビルの合間の暗闇に戻る。

そこには先ほどの静寂はなく、いくつもの人影が動きまわっていた。

ビルの隙間、或いは廃ビルの屋上に立ちライフル、ヘビーマシンガンを取りまわす同型機が約二十機。

仲間が膨大な弾幕を作っていく中、その後方には巨大なトラックが何台も止まり、暗闇に動きまわっていた。

それは黒い巨人を収める程に大きなコンテナを牽引していて、紅い瞳の巨人はコンテナへと友軍機を引っ張っていく。

『——ユウ隊長。更に増援が十機』

『作戦は変わらん、戦線を上げる——流れ弾に当たるなよガングレド。皆にも伝える』

『了解』

ガシャンと重たい音立てて肩装甲に壁の固定用ハンガー。

巨大なコンテナに収納され、黒い巨人はその場で蹲るままに、力なく項垂れ、紅い瞳の巨人は同じく片膝をつき項垂れる。

シューウウウ……

装甲隙間から噴き上がる圧縮空気の解放により、舞い上がる長い銀色の髪。

そして首元の装甲が内側から開き、首の後ろから顔を出す人影が一つ。

「エトナ、大丈夫か」

コンテナ内のライトに照らされる銀色の体毛。

鋭く細める紅い双眸。

鼻腔は獣の如く突き出し、牙を大きな口の端に覗かせながら、そこには狼の頭を持った男が巨人の肩に立っていた。

口元には通信用マイク。

天井を指す尖った耳がヒクヒクと動き、熱っばいたため息が白んで口の端から零れる。

銀色の尻尾は黒いスーツから飛び出し風に舞い、巨軀が飛び降りるままに、目の前の友軍機へと足を運ぶ。

長い足の爪が歩きながらコツコツと床を叩き、ユウと呼ばれた狼男は同じく首の折れた巨人の下へと歩いていく。

「エトナ、返事をしろ」

「待って……ください。ちょっと、ハッチが歪んで——」

バキリッ

首元の装甲が剥がれ落ち、飛び出す人影が一つ。

そこには同じく顔が少し茶色い体毛に覆われ、尖った耳が黒髪から飛び出す『人間』がパワードスーツから飛び降りてきていた。

ドロドロになった白い肌。

キョトンとなる同じ紅い瞳。

『獣人』と呼ばれる人間は、互いに見渡し、ニイと笑みを浮かべるままに、グニヤリと指で互いをつついた。

「よく生きた……」

「えへへっ——隊長超格好いっすよ」

「ありがとう、アリシアの報告だと、送電施設がこの向こうにあると聞いたが」

「はい、隊長の行ってた通り——奴ら、ここから都庁まで電気を送っているようです」

「敵の数はどうだ？」

「一杯」

「数えてくれ……」

「えっと——百ちよいのエルザが配備されてしまったね。自走砲もいくつか配備されていました。」

ただ送電施設自体に防衛機能はないように思えます」

そう言ってパイロットスーツの胸元から小型のPDAを取り出しつつ、年端もいかない少女はそう告げる。

銀の狼男は表情は強張ったまま小さく頷くと、肩越しに彼女、エトナのPDAを覗く。

「隊長、携帯の覗きこみはマナー違反です」

「固い事言っなよ——施設自体にシールドエフェクトは？」

「アリシアがスナイパーでつついたけどなにもありませんでしたよ？」

「……。そろそろ来るわけだ」
ペタンとげんなり気味に垂れる尖った耳。

肩を落とし苦い表情を浮かべる狼男横目に、少女、エトナは気まぐすそうに笑みを滲ませながら首をすばめた。

「どのみち皆相手するわけだしいいかなって……」

「お前が死んだら俺は悲しい……今後は危険の無い方法で探るよう」
に」

「——はいっ」

「少し休んでろ——ガングレドッ」

照れくさそうに身体をよじるエトナを横目に、狼男は耳元に取り付けた通信用バイザーに手を掛けた。

そして尖った耳の向こうに、弾丸の発破音に混じって男の声が聞こえる。

『隊長。増援が更に十機——更にフィールド外からこちらに十機。上空から攻撃ヘリが見えます』

後エルザ輸送機がスポットライトの向こうに見えます』

「頃合いだな——フィールドを迂回して送電施設を破壊する。そちのチームには俺が入ろう」

『了解。我々は引き続き攻撃を続けます』

「戦線だけは崩すなよ。お前達だけが頼りだ」

『期待に込えて見せます、通信終了』

ブツリと音が途切れる。

狼男は強張った表情のまま小さく頷くと、やがてバイザーの周波数を変え、今度は別の人間に通信を掛けた。

「ゴルドチーム——ミハイル、ベス、ピーター、ハルキ。聞いているか」

『はいはい。聞いてます隊長っ』

『時間ですか？』

『やっぱり撃ちつぱなしは楽しいけど少しダれるぜ……』

口々に話す仲間の言葉に、苦い表情を浮かべながら、狼男はため息を漏らしつつ、彼らに命令を届ける。

「よし揃ってるな、ゴルドチームは今から部隊を離れフィールドを迂回して送電施設を破壊してもらう」

『了解。すぐ切り上げます』

「こっちには俺も入る——」

と、通信にノイズが入り、聞こえてくるのは甲高い少女の、嬉しそうな緊迫したような興奮した声だった。

『ユウツ、ダメだよっ』

「——ミアか……」

ペタンと頭に張り付く尖った両耳。

少しうんざりしたような表情を通信機越しに見せながら、ため息を噛みしめ、銀の狼はマイクに息を吐きかけた。

「で、どうした……」

『同じように迂回してこっちに近づいている連中がいる。こっちのソナーに今一瞬だけ映ったよ』

「……ガングレドッ」

通信の周波数を合わせて、先ほどの男に話しかける——

『攻撃が続けていますが、フィールド内で他に敵の姿は見えません。サーモも使っていますが』

「ありがとう。前進しろ。各機散開して敵の迎撃にあたれ。少しでも前線を上にあげていけ。ただし」

『無茶はするな——了解ッ』

発砲音交じりの通信が途切れる。

「……地下の鉄道か」

『ステルスエフェクトを使用しているね。もたもたしているとこっちが挟撃に合うよ』

「ああ……」

狼男は表情は強張らせたまま、踵を返すと眼前にそびえる五メートル強の黒い鎧の巨人を見上げた。

——東京獣人反乱軍所属機体、オルフェト。

エグザスを作り上げたアトモス・ホークライン社が独自に作り上げた強化骨格の規格であった。

エグザスとは違い、小型核反応エンジンは使用せず、特殊なエネルギーを使用した機体で、出力は低めなもの、その動きはより柔軟により人間らしい動きを可能にした、まさにスーツであった。

獣人の特質、その敏感な知覚にリンクさせ、索敵範囲を上昇させる能力があり、更に獣人の強靱な肉体を機体に反映させるために、搭乗者の能力によって機体の出力、及び装甲強度が大きく向上する機体だった。

エルザと違い、出力、性能と共に搭乗者の如何によってすべて決まる、そんな特殊な機体が配備されていた。その中心にはその特殊なエンジンが関係していた。

銀の狼男、ユウ・ハヤテが乗る機体は、その機体弾力性を更に特化させた機体であり、機体の能力よりもパイロットの身体能力が優先される機体だった。ただその装備はほぼすべて内蔵であり、内蔵機関砲、対装甲用ブレード、広範囲ステルス機能と特殊音波発生装置以外は装備されていない。

高機動を追求するために装備を内蔵した機体——そんなスラッとした躯体の巨人を前にユウは銀色の体毛を逆立てる。

興奮に僅かに鼻息を荒くしながら、スウと目を細め巨人の装甲に手を触れる――

「――行こうか、相棒」

『ユウ、どうするの?』

「……ミア。ソナーで確認できた場所は?」

『ここから北東に一キロ先』

「ゴールドチームに連絡しておいてくれ……アルファチーム。アリシア、ミナト、ユン――エトナは無しで」

後ろで愕然とした表情を浮かべる小さな女の子を横目に、狼男は通信バイザーを手に当て地面を蹴りあげた。

『隊長?うちのエトナがまたなんかやらかしました?』

「嫁を戦場に出すお前によりましたよミナト……別動隊がこっちに來ている、迎え撃つぞ」

『――人出が少ないんですよ……こちらは』

「自分の手で守るように努力しても罰はあたらんよ――ポイントをこっちで指定する、二分後に來い」

『了解ッ』

『あ、隊長。私の評価は――』

「アリシア、後で説教だな」

『――すみません……』

通信が途切れ、銀の狼男はパワードスーツ、オルフェトの肩に飛び乗ると首の後ろに跳び移った。

そして、開いた首の装甲の中、ハッチの奥へ大きな体を滑り込ませる――

――暗闇に目の前に映る分厚い機械の棺桶。

立ったままの操縦。身体がすっぽりとはまるような感覚でコックピットに身体が収納される。

目元に自動でヘッドマウントディスプレイが取り付けられ、僅かに伸ばした手足が周囲の機械にすっぽりとはまる。

それは機体追隨の為の操作デバイス、狭い空間の中に手足が壁に

収められる。

そして頂垂れるままに、狼男はディスプレイの向こうに映る、ムスツとした獣人の少女を見下ろし笑みを浮かべる。

ガシャリ……

身体をよじるままに、黒き巨人、オルフェト・オルタカスタムを立ち上がらせる。

『——エトナは休んでおけ。俺が代わりに入る』

「ず、ずるい！」

『女は生きた方がいい』

「な、なんですかそれえ！？」

『俺の単なるわがままだ——ミア、出るぞ』

紅い残光を引きながら踵を返すままに、音もなく地面を蹴りあげる巨軀。

ヒュオオオッ

突風を引きずりながら、高速で飛び出す黒い巨軀はまるで風の如く銀髪の後立を靡かせ再びメグロの廃墟へと姿を現した。

飛び出すままに振り返れば、そこには広がる浅いクレーター状の更地。

その中には崩れたビル of 瓦礫を盾にして撃ち続ける味方オルフェトの姿、その奥で後ずさる敵機エルザの姿が見える。

前線は少しずつ上がっている。

その向こう、スポットライトに照らされ巨大な施設が見えた。

丸いドーム状の建物、周りには低い塀があり、その周りには巨大なパイプがまるでイカの足ののように八方に伸びていた。

日本連邦政府所有の特殊電力送電施設。

ユウ達が壊すべき建物が、浅いクレーターフィールドの遥か向こうに見える——

(……ガングレド、頼むぞ)

戦い続ける仲間を横目に、風を切り翻す長い銀髪。

ドスンッ……ドスンッ

ビルの屋上に飛び上がるままに、ゆつくりと沈む廃ビル。

閃光を背に飛び上がる黒い巨人は、いくつものビルの屋上を伝い、宵闇の中を潜るように前かがみに駆けていく。

夜風を切りながら紅い目を暗闇に光らせ、弧を描いてビルから飛び降りる――

『ミア、このあたりか』

ズウウウンツ

土煙を上げ、地面に降り立つ黒きオルフェト。

長い後ろ髪を靡かせながら、しなる膝を動かし立ち上がると、狼男は首を動かし周囲を見渡した。

『ここだよ、ランデブーポイントもここに設定したよ』

『ありがとう』

地響きが収まり、静まり返る夜の街。

廃虚の街を流れていく風。

土煙が晴れ、周囲のビルの窓から顔を覗かせた異人の骸がモニターに映る。

グシャリ……

地面に転がる無数の死体を踏みしめ、ゆつくりとユウのオルフェトはビルの壁に腕を這わせ路地を歩く。

だが敵の姿は見えなかった。

崩れかけたビルが斜めに折り重なりながら、眼前の視界を遮るのみ。

カラン……

傾いたビルの窓から剥がれたガラス片が装甲を撫でる。

地面を押し込む巨人の足音が静かにビルの間を反響し、冷たい風が黒い装甲を撫であげていく。

グルルルウ……

緊張に喉を鳴らす――

『……そこか』

――ヒクリと尖る耳。

遠くから聞こえる、キヤタピラが地面を擦る音。

鼻筋を掠めるは、金属の擦れる独特の匂い。

来る――

『隊長、今つき――』

『――アリシア、ユン下がれ！ミナト行くぞ！』

『了解！』

『出力調整――パルスバスターツ』

後方のビルから飛び込んでくる中距離装備のオルフェトを背に、
紅き瞳のオルフェトは地面に大きく足を踏み込んだ。

ザクリツ

脚部の装甲が展開し、四本のステークが微振動を上げてアスファ
ルトに突き刺さる。

『――始動』

足元から噴き上がる土煙。

ソレと共に、地面が大きく崩れ落ち、紅き瞳のオルフェトは地崩
れに吸い込まれるように土煙の中へと潜った。

ソレと共に後ろからついてきていたアサルトライフル装備のオル
フェトが土煙の中へと飛び込み、遅れて極長のバレルを備えた対装
甲ライフルを担ぎ二機のオルフェトが続いていく。

そこは更に深い暗闇。

入り組んだ道はまるで蛇の如く、縦横無尽にメグロの地下を走り、
立体状に入り組んだ暗闇は正に迷路だった

東京地下メトロエリア。

地下一キロに及ぶまでに広がった地下鉄道のうねりの表層へ紅き
瞳のオルフェトは降り立つ。

――暗闇に迸る激しい閃光。

刹那、天井から降り注ぐ土煙を貫き、いくつも弾丸が小さな雨を
となって、地下鉄道を走った。

クワツと見開く紅い瞳。

身じろぎひとつで弾丸をよけるままに、四機のオルフェトは背後

から飛んでくる硝煙の匂いに身体を屈める。

そして、細長く入り組む鉄道の向こう、暗闇の中で銃撃を行うエルザを捉える。

数は五機。

圧倒できる――

『突っ込む――ユン、アリシア。頼むぞ』
『了解、エンゲージ』

――左腕から迫り出す鋭いブレード。

弾丸に目を細めながら、紅き瞳のオルフェトは脚部の補助スラストーに火を灯し、ゆつくりと身体を屈める。

飛び出さんと、黒い装甲を震わせる――

『ミナト、俺のケツを持て、行くぞッ』
『張りきって行きましょうか隊長！』

――闇に走る紅い残光。

装甲の隙間から噴き上がる光の粒子。

屈む姿はまるで狩りをする夜の獣の如く――紅き瞳のオルフェトは光を放ちながら地面を蹴り飛び出した。

何百メートルとある距離は一秒の壁を越え、縮まる。

後ずさる暇すらなく、五機のエルザの目の前に、紅き瞳の巨人が、大きくブレードで虚空を薙ぎ払う姿が見える。

二機の機体の表面に一文字に斬った痕が浮かび、火花が宵闇に断続的に光を放つ。

『遅い……！』

後ずさる三機を追いかけ、紅い瞳のオルフェトの背中から飛んで来る弾丸。

片膝を折り、銃座を立てて放つ二発の徹甲弾は頭部を丸ごと粉々にして、衝撃に二機のエルザを吹き飛ばした。

暗闇の中バウンドする二機のパワードスーツ。

闇に尾を引く紅い瞳。

その二機の胸部に喰らいつくように、飛び出した紅き瞳のオルフ

エトは、突き出した内蔵ブレードを突き出した。
ガガガッ

全重量を乗せ、火花を上げ装甲を抉る鋭い刃。
ビクンと僅かに喰らった躯体が痙攣すると共に、音無く内蔵ブレードを引き抜けば、黒と赤の混じった飛沫が中から噴き上がる。
黒ずんだ装甲が僅かに闇に光り、紅き瞳は血飛沫を浴び倒れたもう一体を捉える。

スウと双眸を細め、巨軀を傾ける――

――風を切る鋭い剣閃。

振り難いだ刃は僅かに真空を生み、無音の衝撃波が周囲の景色を歪め、頭部の無いエルザに一本の筋が浮かぶ。

それは闇にくつきりと浮かぶ斬痕。

死線に沿うように胸部が縦に分かれていき、火花を散らし二つに分かれた断面が露わになる。

背を向け立つ紅い瞳の巨人の背後で、大きく爆発を起こす――
『残り……』

爆発を背に、立ちあがる巨軀。

爆風に銀色の後ろ髪を靡かせながら、紅い瞳のオルフェトはスウと闇に眼を細め身体を屈める。

ダラリ左腕を垂らすままに火花を立て地面を擦るブレード。。

最後の一機が後ずさるままに、ライフル弾を飛ばそうと携行小銃をにじり寄るオルフェトに掲げる。

――ドドドッ

闇に迸る断続的な閃光。

胸元を抉る三つの大きな弾痕。

巨大な空薬莢が足元に落ち、三点バーストに掲げたライフルの銃口から白煙が噴き上がる。

ゆつくりと小銃を構えたまま倒れるエルザを横目に、ミナトのオルフェトは肩にアサルトライフルを担ぐ。

そして、アイサイトの向こうに、身体を屈める黒き獣の鋭い眼光

を見下ろす――

『――良い腕だ』

『一匹残してくださいよ……』

『遅いお前が悪い』

『ひどい隊長。これが俺らのトップとか……』

『いやか？』

スウと細める紅い双眸。

左腕に内蔵ブレードが装甲に収納され、屈めていた身体がゆつくりと起き上がり、紅い瞳のオルフェトは三機の友軍機を見つめる。

全機の生存を確認する――

『うんにや。最高ですよ』

『ありがとう。……ミア、奴らのルートはどこからだ？』

シューウウウ……

装甲の隙間、或いは関節から零れる光の粒子。

長い銀髪の後立を翻し、紅い瞳の残光を引き、オルフェトは入り組んだ周囲を見渡し、線路を踏みしめる。

『――ん。解析完了。そっちエルートから来ているよ。地図をこつちで出すから』

『いや。こつちから送電施設には入らん。ゴールドチームがやってくれるだろうし、こつちは挟撃が入らないように見張る。』

他に挟撃の入りそうなところは？』

『――いくつかありそうだけど、今のところどこも反応はないね』
『ポイントを提示してくれ。マンツーマンでオルフェトを向かわせる』

『本気でメグロを落とすの？』

『不利な戦いは今に始まったことじゃない』

地下鉄エリアから撤退を始める三機のオルフェト。

地面を蹴りあげ、紅い瞳のオルフェトは地面を蹴りあげ、地上から入ってきた天井の穴へと戻ろうとする。

長い後ろ立てを引き、その場を去ろうとする――

——フワリ……

銀色の後ろ髪が、舞い上がり、肩装甲を撫でる。

『！』

反射的に迫り出す左腕内蔵ブレード。

立ち止まった紅い瞳のオルフェトはそのまま後ろを振り返るままに、グツと身体を屈め暗闇に向き合った。

『隊長？』

『風が来た……』

『どうい——』

『地下鉄に乗ったことぐらい、お前にもあるだろうユニ』

そして入り組んだ線路の向こう、蛇の如く大地の食い破る迷路の奥を覗く。

生温かい風に目を細める——

『来るぞ！』

——暗闇を再び破る激しい閃光。

ヒュオツ

風を切り、巨大な槍のような弾丸が、アリシアのオルフェトの腕部を持っていた対装甲ライフルごと根こそぎ持っていった。

『キヤアアッ！』

吹き飛び地面にバウンドして転がるアリシアのオルフェト。

ユニのオルフェトは後ずさるままに、闇の向こうから攻撃してくる敵の気配に後ずさりつつ、狙撃銃を構えた。

だが矢次に降り注ぐ弾丸の中、照準はブレ、弾丸はあらぬ方向へと飛んでいく。

それでも、立ち上がるアリシア機をミナト機と共に庇いつつ、銃口を迷路の暗闇に向けトリガーを引き絞る。

『た、隊長……！』

『アリシア、どうだ！』

『くう……腕……痛い、かも……』

『引くぞ！ステルスエフェクト起動する！』

——噴き上がる光の粒。

右腕の内蔵機関砲を放ちながら、紅き瞳にオルフェトの黒い装甲が一斉に花びらを開くように開いた。

そして開いた装甲の隙間から光の粒が噴き上がり、闇をうつすらと照らすままに四機の機影を光の中に溶かしていく。

そして光の膜は膨れ上がるままに、四機の姿を完全に消し去り、やがて収縮する。

スウと小さくなり、やがて粒子が消えてなくなる頃には、オルフェトの姿は闇の中に沈んで消えた。

それでも止まない、闇を照らすマズルフラッシュ。

銃撃は止まず、暗闇の中、四機のオルフェトがいた場所へと十機のエルザは弾幕を浴びせかける。

敵を殺す様に確実に、銃撃を浴びせかけていく——

『……ユウ……てめえ……』

暗闇の中、呻くような声が闇に響いた。

『殺してやる……絶対にだ』

それは怨みに満ちた『人』の声だった。

四話目

「大丈夫か、アリシア……」

線路の奥へと退避しながら、紅き瞳のオルフェトから降り、銀色の狼は片腕のなくなった友軍機へと歩み寄った。

周囲の二機も同じく線路の隅に座り込み、壁にもたれかかったアリシアのオルフェトへと歩み寄る。

そしてヨロヨロと首元から這い出す人影を捉え、銀の狼男は地面を蹴り飛び上がる。

「隊長……すいません」

「よかった……」

—— ホツと零れるため息。

そこには肩装甲に寄りかかるままに、あり得ない方向に曲がった右腕を垂らす獣人の少女がいた。

だがそれ以外に身体的外傷は胸元の折れたアバラ骨ぐらいでユウは満足げにうなずく。

「生きているだけでいい…… ユン、ミナト、大丈夫だッ」

「よかったぁ…… アリシア、ボケツとすんなよ頼むから!」

片腕の無いオルフェトの足元、黒い狼男のユンから飛び出す涙の罵倒に、アリシアはうつすらと笑みを零した。

と、スツと折れた腕に這う太い指。

痛みに体毛の滲んだ顔をしかめながら、目線を上げれば、そこには険しい表情を浮かべる銀の狼男の姿。

突き出た口腔を僅かに開き息を吸い、紅い瞳を細めて指を折れた部分に這わせる。

目を閉じて、囁く――

「エトリア——アストライア……」

——手の平から噴き上がる光の粒。

刹那、囁く銀の狼男の手の平の中に円形の模様が浮かんでは空中に刻まれ、光の粒が零れた。

光の粒は、円形の模様から少女の腕を癒す様に纏っていく。

そして光の膜に腕全体が包まれるままに、ポカンと惚ける少女の腕の形が真っ直ぐになっていく。

ゆっくりと紅い瞳を開ける——

「……少しは楽になったか？」

「は、はい……今は」

「仲間には内緒だ——ユニ、ミナト、アリシアを前線まで送れ」
手を閉じるままに、消えていく円形の模様。

ソレと共に光の粒もその姿を消し、ユウは肩装甲の上に立ち上がるままに、線路の向こうへと振り向いた。

フワリ……

噴きこんでくる生温かい風。

——ガシャン……ガシャン……。

ヒクリと耳を尖らせながら、遠くから聞こえてくる重たい足音。
にじり寄る敵意に逆立つ首の体毛。

徐々にだが、敵の気配が近づいてくるのが突き出た鼻をつき、鼻筋に皺を浮かべながらユウは険しく目を細めた。

「……敵が来る。時間がない」

「隊長は？」

「増援を連れて前線には戻れん。ここで食い止める」

「はあ!？」

惚けた声を上げるミナト、ユニは同じくぽかんと耳を垂らし口を開いたまま絶句していて、ユウは小さく肩をすぼめた。

「まったく——ならお前達が食い止めるか？」

「いや……でも……」

言い淀む二人。

蹲る彼女の身体を両腕に抱え上げると、黒い装甲を蹴りあげ銀の狼は二人の下へと降り立つ。

そして、二人にぐったりとなる獣人の少女を渡すと、銀の尻尾を翻し獣は再び片腕のないオルフェトへと向かう。

スツと手の平を黒い装甲に添え、ゆつくりと目を閉じる――

「……エトアス――ファナトオルカ……」

「隊長？」

「……。俺一人でもどうにかなる、お前達は帰ったらゴールドチームの支援に回れ」

そう言いながら、ゆつくりと半壊したオルフェトから手を離すと、ユウは惚ける二人にそう告げた。

――それは舞い散る蛍のよう。

音もなく弾ける粒子の花びら。

刹那、装甲の隙間から無数の光が舞い上がっては、周囲の暗闇を照らし、ゆつくりと銀の狼に降り注いだ。

グツと掲げて広げる手の平。

吸い込まれるように光の粒が、銀の狼の手の平へと集まっていく。それはまるで渦を描くように――

「マジでやる気だこの人……」

「無茶はお前らより下を行っているつもりだ。早く行け」

「……」

「ああ。俺のオルフェトを使え。お前達のオルフェトじゃ、アリシアの搬送はできんだろっし」

「――しかも生身で戦うと言う……ガングレドさん失禁しますよ」

「友達が待っているからな……」

「はぁ？」

「――なんでもない……」

小さくため息をつくままにユウは手の平を下ろす。

――噴き上がる光の粒。

そこには小石程の大きさの白い結晶が獣の手の中に漂い浮かんで

いて、狼は静かに手の平を閉じ、胸ポケットに収めた。

そして踵を返すままに、惚けるユンとミナトを促し、アリシアを紅い瞳のオルフェトを搬送させる。

「ほら行け。ここは俺が食い止める」

「——十分経って帰って来なかったら……援軍にきますから」

「心配性だな……」

「アンタのせいでしょうがッ！」

怒号が古い地下鉄に迸り、ミナトはムツと顔を引きつらせながらアリシアをユウのオルフェトへと乗せた。

そしてユンとミナトもオルフェトに乗ると、やがて三機の巨人が銀色の狼を見下ろす。

少し心配そうに立つ三機の友軍を見上げ、銀の狼はペタンと耳を垂らし困った笑みを滲ませた。

「大丈夫、早めに帰るさ。銃も弾薬込みで結構持つてる」

「——帰ったらガングレド副長にチクリますから」

「後で怒られるさ。……行ってくれ」

「あんたは俺達の希望なんだ。……死ぬなよ隊長っ」

「ここから百メートル行ったら地上に上がれ。敵はすべて本隊が対応しているが一応索敵は怠るなよ」

『了解、御武運を』

迫り出す脚部のキヤタピラ。

土煙を上げ、騒音と共に二機のオルフェトはアリシアのオルフェトを肩に担ぎながら線路を走りだした。

噴きこんでくる風とは反対方向に、闇の奥へと沈んでいく——

——別に、一緒に戦ってもよかった。

ペタンと零れる尖った耳。

スウと闇の中、紅い瞳を細め困った笑みを滲ませるままに、銀の狼男は腰に手を当て踵を返した。

そして暗闇の中、僅かに俯きながら地面を蹴り歩き出す。

巨大な迷路の中、反響する自分の足音を聞きながら、静かに息を

吐き出し花をヒクつかせる。

獣の顔を強張らせ、闇の中にゆっくりと目を閉じる。

——ただ、これは俺の我がままだ。……最初から最後まで、全部。

ザワリ……

風の向こうに感じる敵意に逆立つ体毛。

鼻筋に自然と皺がより、牙を覗かせ獣人は体を僅かに奮わせ、腰から二丁の拳銃を引き抜いた。

大口径の自動式拳銃。

五発カートリッジの大型弾を装填し、獅子鼻のマズルブレーキを覗かせる巨大なバレルを持つ大型拳銃だった。

グツと握りしめれば、手に吸いつく感触。

それだけで安心感が胸を走り、狼はうつすらと口元に笑みを浮かべながら、獣顔を上げる。

暗闇の奥、入り組んだ蛇の如き道を伝い、やってくる十機の気配に尖った耳を震わせる。

向けられる激しい敵意に、脚を止めて二丁の銃口を向ける。

鋭く、ナイフのように鋭く目を細め、狼は闇に紅く残光を引く——

「……一週間ぶり、だな」

『……生きてたか……化け物が』

立ち尽くす銀色の獣人を前に、従軍を止める十機のエルザ。

ソレと共に十の銃口が狼男を捉え、その内の一体、白い装甲のパワードスーツがゆっくりと彼の下に歩み寄った。

吐き気がするほどにドロドロとした敵意。

剥きだす憎悪。

七年前から何も変わらず——

狼はニイと目を細め困ったような笑みを滲ませては、二丁の拳銃を構えたまま目の前の巨大な白い巨人に肩をすくめた。

そして、口を僅かに開いて、闇に囁く——

「……よお、タクト」

『ユウ……ユウ・アトラ……！』

「やろうか……」

『殺してやる……！』

——それ以上の会話はなく、ただ獣は紅い瞳を細める。

ガシャリッ

殺意と怨恨を露わに、白いエルザは持っていた巨大な突撃小銃を両腕にサッと構えてトリガーを引き絞る。

ソレと同時に銀の狼は、拳銃のトリガーを絞り、マズルフラッシュが闇を裂く。

ドオオオオオッ

光に遅れて、激しい銃撃音が闇の中に響き渡った。

五話目（前書き）

英数字か漢数字に統一しろって？イヤ（＊、ω、＊）うん、これ投稿して七日後削除してから直す事にする

五話目

2056年、二月十三日、午後六時七分。

僕は彼女と彼女の兄との三人で家路についていた。

名前は、綾川美沙。

僕の一歳下で高校一年生で、僕の好きな人だった。色白で綺麗な黒髪は肩まであって、スラッとしていて出も少し背は低くて僕を見上げるくらいで。

笑顔がとても綺麗な、僕の大好きな人だった。

明るい性格で皆に好かれていて、所属するテニス部でも優秀で顧問の先生が彼女を褒めていたのを覚えている。

非の打ちどころの無い、本当に素敵な人だった。
ずっと一緒にいたかった。

「どうしたの？夕君？」

「また何か考え事をしてたんだろ。ぼおつとしてるからな夕は」

「——拓斗は考えなしなんだよ、僕は色々考えてるの」

彼女の隣に立っているのは、彼女の兄の、綾川拓斗。

僕の数少ない友達で、多分、僕の恋敵になるだろう人だった。

スポーツも万能で、少し勉強はできないけど、それでも頭は回
し、彼女と同じくらい明るく、皆に好かれていた。

二人とも、僕にとってあこがれの人だった。

特に拓斗は、僕にとってある種嫉妬を覚えさせるくらいに、優秀
だった。

「ぬかしおる」

「……にひひっ、勉強だって僕の方が上だしね」

「——お前、俺が本気出したらちびるで」

「僕、スポーツなら君の本気見たことあるけど、勉強で本気を見たことないんだけど」

「あるぜ？」

「夏休みの宿題は僕が半分手伝ったよ？」

「——あるよ、多分」

「ネタ潰し成功」

「くああああ。むかつくつ、お前ホントムカツクわっ」

「にひひっ」

地団駄を踏みながら歩く拓斗に、僕は肩を震わせて少し小気味よく笑う。

多分、彼はそれほど悔しくないのだろう。彼も自分が頭がいいのはなんとなくわかってるだろうから。

だけどそんな素振りをしてくれるだけで、僕の自尊心は満たされた。

その事も、彼はわかってるだろう。

悔しいような、嬉しいような——僕は複雑な笑みを浮かべ、隣で歩く彼女を見下ろした。

クスクスと彼女は端正な顔を綻ばせ、嬉しそうに笑っていた。

「ふふふっ……お兄ちゃんも夕君も楽しそう。私も混ぜてよっ」

それだけで、胸が破裂しそうな程高鳴って。

声が出なくて——

「ふうんだっ。勉強なんぞできなくてもな、スポーツで俺は宇宙に出るんだよっ。宇宙バスケに出るんだよっ」

「お兄ちゃんそればかり。勉強もできないと、外国の人と喋れないよ？」

「美沙もそんな事言う、お兄ちゃん悲しい……」

「だったら夕君みたいに勉強する？」

「——肉体言語があるっ。外人なんざイエスとノーが使えれば後は体でぶつかればええ事よっ」

「だから毎日傷だらけなんだ……」

「あ、ち、違うの——ああ、そんな目で見ないでお兄ちゃん気持ちよくなるううう」

「……夕君いこっ」

そう言つて悶える拓斗を横目に、彼女はギュツと僕の腕に腕をかためて、惚ける僕を引つ張る。

彼女の体温が伝わり、少し荒い息遣いが聞こえる。

少しムスツとしていて、それでいて少し微笑んでいるような小さな唇が見える。

惚ける僕を横目に見上げ、少し照れくさそうに笑う彼女がいる。

その笑顔がとても可愛くて、僕は顔を耳まで真っ赤にする——

「……」

「……ねえ夕君」

小声で華奢な身体を寄せながら、彼女は肩にコツリと頬を擦りつける。

それだけで、僕はどうしようもなく戸惑い、口がまともに動けなくなり、手足がびりびりと痺れる。

どうしようもなく、彼女の事で一杯になる。

息が上がり、寒いのに体の芯から真っ赤になっていく——

「み、美沙ちゃん……」

「えへへへっ……恋人同士みたいだね」

「——」

正直ここから先は、あまり自分が何を言ったのか、彼女が何を言っていたのか思い出せなかった。

ただ、彼女が微笑んでいたのを覚えていた。

それだけが、胸の奥深くまで刻まれていた。

とても綺麗な笑顔だった。

「ねえ……夕君。明日、誰かからチョコもらつ事とかある？」

「え……えと、お母さんから貰うとか……犬のチョコに上げるんだけど僕は……えと」

「ふふっ。男の子なの？」

「う、うん毎年お父さんがあげる振りしろって……うん……」

「——私から貰っても嬉しい？」

「も、もちろん……うんっ、嬉しい……嬉しいよっ」

「——ぎ、義理だからね」

「う、うんっ……」

「お兄ちゃんと一緒だし——勘違いしちゃだよっ」

「う、うん……でも、嬉しい」

「——明日、ちゃんと作るからねっ」

嬉しそくに、彼女は微笑んだ。

夕闇の中、少し頬を染め、黄昏時の空の下、僕の腕に華奢な身体を寄せながら彼女は、僕にそう告げた。

僕はというと、全身真っ赤にして、頭から湯気が出そうなくらい息を上げていた。

正直なところ言つと、血管が切れて死にそうなくらい、心臓がバクバクいつていた。

そんな音を彼女に聞かれたくなくて、僕は胸元を僅かに抑えた。それでも、心臓の音は止まらなかった。

「こらあああ！そんな異性交遊お兄ちゃんは認めんぞおおお！」

飛び込んできて、僕らの愛大人ってくるのは拓斗。
ムスツとこちらを睨む彼の横顔の向こう、突然の兄の行動に惚ける彼女の顔が見えた。

そして、僕の方を見た。

優しく微笑んでいた。

ホッとするような少し寂しいような——僕は再び三人で夕闇の街を見下ろし、坂道を上がっていく。

いつも一緒に、長い坂道。

隣同士の家を目指し、共に歩いていく。

そして明日も、同じように、登校時間、三人で隣同士の家を出て、この坂道を降りて同じ高校へと行くだろっ。

ずっと一緒に——

「おい、何話してたんだ夕？」

「—— な、なんでも……」

「…… 美沙あああ、お兄ちゃんに黙って夕と付き合う気かあ!？」

「バカ兄貴ッ！」

鉄拳が右頬にめり込み、拓斗が吹き飛ぶ。

変わらぬ日常の風景。

ずっと続けばいいと思った。

—— だけど、それも程なく終わるだろう。

拓斗はスポーツ推薦で他の大学へと行くだろうし、美沙ちゃんは頑張っている大学に入ることだろう。

僕はというと、親の頼みもあり、高校を出たら働くつもりだ。

今年は高校二年の二月。

もう進路を決めないといけない。

別々の道を歩いていけないといけない。

だから、伝えたかった——

「…… 美沙ちゃん」

「何夕君っ？」

彼女は僕の呼び掛けに微笑んでくれた。

それだけよかった。

—— 明日、彼女に告白しよう。

ちゃんとしたチョコを作って—— 本当は女の子が男の子に上げる日なんだけど—— 彼女に渡そう。

振られた方がいい、このまま何もないまま終わらせたくない。

決別するために、或いは次につなげるために

僕、夕・アトラは明日告白する事に決めた。

明日、二月十四日。バレンタインデー。

あの日に、俺は彼女に愛を告げることを決めた。

人類の割が死滅した、あの地獄の日に、俺は彼女と共に生きようと決めた。

五話目（後書き）

一人称と三人称のコラボオオオオ

六話目（前書き）

この辺りからちよつと文章があやしくなります（下手くその的な意味で。まあニヤニヤ見てやってくださいな

六話目

『……ここらへんだな』

——遠くに見えるは、スポットライトに照らされた巨大なドーム状の白い施設。

あちこちに聳え立つ煙突からは、煙ではなくうつすらと白い光の粒子が噴き上がり、警報が暗闇の中に絶え間なく響く場所。

そこから遠く、三キロ離れたビルの屋上。

四機の黒装甲の巨人、オルフェトが四つの廃ビルの屋上に立ち、足もとのコンクリートに固定用のアンカーを打ちこんでいた。

肩には、巨大な筒が二本。

両腕にはグリップとトリガーが付いたフレームが握られていて、三機のオルフェトは肩に装備した二本のバレルを外し、残りの一機は周囲を警戒する。

そして、巨大なバレルを連結し、出来上がったのは、約全長十メートル超のパワードスーツを優に超える巨大砲台。

それら三つの砲塔が、白いドーム状の施設に向けられ、バレルの底部から三本脚の脚立が迫り出す。

そして隣のビルの屋上に脚立が突き刺さり、三機のオルフェトがグリップとトリガーを抱えたままその場に膝をつく。

そして膝の装甲が展開し固定用のアンカーが迫り出す中、アイサイトの向こうに巨大な施設を捉える。

『エンジン直結』

『了解。……本隊は？』

『信じるよ。皆うまくやる。これで戦いに一歩前に進める。隊長を』

信じるんだ』

『——うん』

胸元の装甲が開き、剥き出しになる連結部

アンカーが計四基地面に刺さる中、砲台のストック部分と胸元のコンポーネントが連結し、砲塔の先端に光が灯る。

『エネルギーを装填——約五秒後に一斉射を行う』

『了解。ピーター、敵は？』

『ソナーに反応なし——行こうっ』

『カウントダウン開始』

——シューウウウッ

装甲の隙間から光の粒子が噴き上がり、ソレと共に砲塔の先から零れる光が膨れ上がっていく。

そして今にも破裂せんばかりに、光の奔流がバレルの内側で暴れる。

『三、二、一——』

回転し始める十メートル超のバレル。

ドーム状の施設を捉えながらガタガタとバレルが上下に揺れ、排莢口から光の粒子が止まることなく噴き出す。

バレルの回転がさらに早くなり、加速に先端から光の塊が顔を出す。

グッとトリガーに指を添え、アイサイトに真っ白なドームを捉える——

『ミハイル！』

『ゴルドチーム、敵施設を攻撃する！』

——龍の如く飛び出す奔流。

夜に沈んだ街を真っ直ぐに決る光の刃。

三つの光の柱は一つにまとまり、ビル of 廃虚を一瞬で灰に融かし、三キロ先の一直線にドームを貫いた。

追隨するようにソニックブームが立ち上り、土煙と共に周囲のビルを吹き飛ばしドームの装甲をめくり上げる。

そして光の奔流はその射線を太くしながら、内側まで紅く融かしていく。

『破壊を……確認っ』

『よっしゃああああ！』

——ドームの装甲を破り、内側から噴きだす紅い爆炎。

光の斜線が細くなっていく中、ぽっかりと割り貫かれた施設の後壁から大きな爆発が立て続きに起きた。

崩れていくドーム状の施設。

立ち上るいくつもの火柱に混じり、光の粒子が噴き上がって灰に混じって薄暗い闇の向こうへと昇っていく。

ドオオオオッ

爆音は遅れて、四機のオルフェトの下に届き、ビルの合間に反響する。

そしてひと際大きな爆発が起きて、ドーム状の施設が内側からはじけ飛んで、小さなキノコ雲が登った。

そして崩れる建物と巨大な爆発に衝撃波が土煙を巻き上げながら、津波の如く噴き上がり、メグロの廃虚を飲み込み始める。

『回避するぞ！』

『ヤッホオオオオッ。成功成功ッ！』

コンポーネントから外れる巨大な砲塔。

立ち上がるままに固定用アンカーが収納され、三機のオルフェトは廃ビルから降り立ち土煙の津波に背中を向けた。

そしてビルの合間、本隊に向かって、ビルがいくつも倒壊して入り組んだ路地を走行していく。

大きな衝撃波の壁が迫り、次々と倒れていく廃ビルの群れ。

いくつもビルを押し倒し、砂塵を巻き上げながら、爆風が四機のオルフェトを撒きこまんと迫る。

ガガガッ

瓦礫が装甲を叩き、アイサイトに砂塵に吞まれた灰色の景色が映り始める。

『ピーター！』

『シールドエフェクト展開ッ、空間位相転移するッ』

四機のオルフェトが走行しながら集まる中、光の粒子が四機から噴き上がって砂塵に包まれた四つの機体を包む。

ガタガタと瓦礫を弾く分厚い光の膜。

やがて砂塵の津波が去っていくまで、光の膜の中で耐えながら四機は本体まで走っていく。

やがて晴れる砂塵の向こう、弱々しいマズルフラッシュが闇を裂くクレーター状の更地が見えてくる。

そしてその奥に、黒いオルフェトが集まる友軍機の姿がアイサイトに移る。

『ゴルドチーム、報告を』

通信に響くのは、ライフルの重たい発砲音と共に一人の落ち付いた男の声だった。

ガングレド・ハイエク。

獣人反乱軍の副官であり、総大将であるユウ・アトラの右腕としてのポジションを持つ優秀な獣人だった。

ホッと通信機にため息を零しながら、四人はそのガングレドに告げる。

『ゴルドチーム、作戦完遂しました……』

『ねえねえ見たガングレドさんッ、僕らやったよッ！』

『イエエエエイツ、最高ッ！』

本体に混ざる四機の黒いオルフェト。

その言葉に、通信機越しのガングレドの声に、同じくホッとしたような声色が混ざる

『よくやった——全機に通達。これから撤退行動に移る、各員弾幕を張りつつ交代、ポイントSに集まれ』

土煙の中に弾けるマズルフラッシュ。

送電施設を失い、街全体を照らすスポットライトが次々と途切れ、深い宵闇が廃虚の街に広がり始めた。

弾幕を張りながら、計四十機の黒きオルフェトが撤退を開始する。ソレと同じくして、日本連邦軍のエルザもまた、破壊された送電施設の方向へと下がっていき、広大な更地に響く銃撃音が小さくなっていく。

『……ユウ……貴方も早く』

そして、宵闇の中、ビルの間を潜り、黒いオルフェトの群れが下がっていき、再び廃虚のメグロに静寂が広がる。

聞こえてくるのは、砂塵が風に巻かれて傾いたビルの窓を撫でる音。

そして、割れたアスファルトの下、地下から響く、断続的な発砲音とキヤタピラの走行音。

そして、絡み合う二体の獣のうめき声。

地下の巨大な迷路の中、戦う二人がいた――

七話目

「……よしっ」

手作りじゃ、さすがに引かれるかなと思って買ったのは、少し高い店に寄って手に入れたチョコレート。

鞆の中に入れて、少し早めに僕は学校へと家を飛び出した。

「行ってきますっお父さん、お母さんっ」

「はあい行つてらっしゃいっ」

「ちゃんと勉強してくるんだぞ」

父と母は笑顔で僕を見送った。

いつもと変わらない、日常の風景だった。

僕は玄関を飛び出し息を切らし、まだ太陽の昇りかけた朝の七時にあの坂道を走っていく。

ぎこちない顔は、二人に見せられなかった。

キリッとしつかりとした顔を、彼女に見せたかった。

ふと、坂道を降りて行きながら街を見下ろせば、朝焼けが海の方から昇ってきて、街を紅く染めていった。

灰色に染まっていた家の屋根は、光を浴びて様々に色を帯びる。

ゆつくりと朝焼けへと流れていく白い雲は、頬を染める。

広がる海は太陽の光に赤い絨毯を引き、空は茜色に染まっていく。木々は海の風にざわざわと揺れ、遠くで犬の鳴き声が聞こえて、朝がやってくるのを告げる。

——二月十四日。

朝がやってくる。

注ぎ込まれる日差しに、胸の中の期待が膨らむ。

僕は冷たい空気を吸い込み、昇る朝日を全身に浴びながら、少し

だけ顔を強張らせる。

(……彼女に告白しよう)

好きだって。

手を繋いで、一緒に同じ空を見ていたって。

僕は昇る太陽を横目に、また坂道を下りていく。

彼女より先に、下駄箱に手紙を入れよう。

それから——彼女に会って、それから——

そう考えながら、顔がみるみる真っ赤になって、息ができないくらいに胸がドクドク言って苦しかった。

でも、いやな苦しさじゃなかった——

十億人。

残った『人』はそれだけだと思った。

だけど十年もたてば状況はさらに変化——悪化していった。

突然の人々の変異に対応するために、残った人々はどうしたかというと、未来へと時間を早めることに決めたのだ。

その為に各地に存在する緊急用シェルターに入り、冷凍睡眠に入り、状況が収まるのを待った。

もちろん、入れない人も多くいたが、それでも世界各地に存在するシェルターは約八億人を収容して、未来へと旅立った。

——旅立つ、はずだった。

考えてみれば、できるわけがなかった。

この変異は、あらゆる人に平等にして起きるものだった。それが冷凍状態であらうと、何であらうと変わらない。

そしてシェルターも、元は核戦争用で、こんな状況を想定して作

られたものではなかった。

それ以上に、人は多すぎた。

そんな不確定要素が多く孕んだ未来への旅がどうなったかは、言うまでもなかった。

原因は様々ある。

冷凍睡眠に入った『人』の中に『異人』化を起こし、残った人間すべてが殺された。

或いはシエルターが破られ、異人、或いはシエルターに入り損ねた人間達に壊滅させられた。

或いは、そもそもシエルターが機能せず、入った人間すべてが凍死した。

およそ、八億人が入ったシエルターは、全て——洩れなく全て、壊滅した。

残ったのは二億人の『人』と『獣人』だけだった。

ただ、その二億人の『人間』も戦いの中で、徐々にだが減る傾向にあった。

アメリカと中国と呼ばれた国はなくなっていた。たがいに降り注いだ核が命を灰に変えていったからだ。

日本人は、もう一万人を切っていた——殆どの人が併合先のアメリカで核の灰を受けたからだ。

残ったのは、数千人の『獣人』と数千人の『人間』だけだった。

この十年。

世界は更に『人』を間引いていった。

異人化は大凡収まったものの、もう社会を再構築できる程に、世界は体力を残してはいなかった。

文明はおよそ死滅した。

残ったのは、荒廃した世界と、その中で辛うじて生きて、戦争を続ける『人間』の悪意だけだった。

『人』はこの世界に存在していなかった。

人はただ、戦い続ける。

命を削り――例え世界が消滅しようとも、相手を殺そうと、戦い続ける。

八話目

甲板に収納されていく二十機の黒きオルフェト。

収納ハンガーエリアには壁に六メートル強のパワードスーツが固定されたまま、整備員に修理されていた。

皆、身体の一部、全部に体毛や耳など器官の生えた獣人だった。皆、顔を見ればわかるとおり、年端もいかないうちにもばかりだった。

皆、次の戦いに備えて、必死な様相で溶接器具と耐熱マスクを顔にあてがいながら、修理を続けていた。

そこは戦艦『エルドラド』

獣人反乱軍が所有する二隻の機動戦艦の一隻で、比較的小型であるものの、戦闘用設備は充実した核エンジンの艦だった。

大型巡洋ミサイルを三門装備し、実弾砲門は前方と左舷右舷にそれぞれ二門ずつ配備され、CIWSは十基、至る所に装備されていた。またパワードスーツは計四十機程配備できた。

船全体は通常の流線形の形とは違い比較的丸みを帯びた大型艦で、通常上記装備は全て装甲の中に格納されている。

また『エルドラド』は海に潜る事も出来、格納されている装備には対艦魚雷発射砲門を前後に二門ずつあり、水圧軽減の為に広域シールドエフェクトも発動することができた。

そんな『エルドラド』は今、薄暗い東京湾の入り口から離れ海に潜ろうとしていた。

「……まったく、ユウ殿は無謀が過ぎる」

「……。そのセリフは何回も聞いた」

「何回も聞いてなぜ同じことをするのですか!？」

「——バカだからな、俺は……」

ペタンと垂れる尖った耳。

ハンガーエリア上部、吹き抜けを走る通路を歩きながら、銀の狼、ユウは首筋を摩りながら苦々しく顔を歪めた。

後ろには同じく黒い体毛の狼男、ガングレドがブツブツ呟きながら歩いてきている。

さながら家庭教師に怒られているようで、ユウは気まずそうに爪で鼻筋を掻き、ジトリと横目にガングレドを覗きこむ。

「だが……助かったろう？」

「——そのセリフ、皆に言えますか？」

「……すまんよ」

ギロリと恨めしげに蒼い瞳をこちらに向ける副官に、ユウは怖々と首をすくめるままにトボトボと通路を歩いていく。

「隊長おおお！」

と、通路の向こう側から走ってくる人影が四つ。

目を見開けば、そこにはまだ年端の行かない獣人の子供達、ゴルドチームのミハイル、ピーター、エリザベス、ハルキだった。

皆十代もいかない少年少女のような瞳で、銀の狼の腰にしがみつくままに目を輝かせ彼を見上げた。

「ねえねえ隊長、僕らやったよっ」

「ドオオオンッってやったんだぜ、あそこ」

「えへへっ、僕らのおかげだよねっこの作戦」

「——ねえ……僕も頑張ったよ……攻撃はしてないけど」

皆嬉しそうに我先にと話しかけていて、ユウは少し困ったような笑みを滲ませつつ、四人の頭をそつと撫でた。

「よくやった……報告はちゃんと後で聞くが……なによりお前達が生き残って、俺は嬉しい」

「隊長……」

「本当に……お前達が俺の作戦の最大の功労者だよ」
『ウンッ!』

ペタンと撫でやすそうに少し垂れた四人の耳が途端に尖り、皆通路に立ちながら嬉しそうにはしゃぎ始める。

皆、子供のようだった――

「えへへっ、嬉しいな……お父さんに褒められてるみたい」

「隊長は皆のお父さんだよ。強いんだよっ」

「うんっ、強い。絶対に連邦軍をやっつけるんだからっ」

「み、皆……隊長の邪魔だよお……」

「あ……じゃあ僕達行きますねっ」

「ばいばいっ隊長！僕らオルフェトの調整行かないと」

そう言って走り去っていく子供たちを、ユウは複雑な表情を浮かべ手を振る以外に何もできなかった。

ただ、手を振る自分自身に嫌悪感を覚えながら――

「……」

「ユウ殿。彼らは自分の意思で志願しました」

「――そんな状況にしたのは、或いは俺かもしれんな……」

「……戦いに死はつきものです」

「余ったパイロット枠に彼らをあてがったのも、パイロット枠に空席を作ったのも俺だ」

「……」

「現在の戦況、戦力、その他報告を聞かせてくれ。……ミアも呼んで今後の状況を考えたい」

「はいっ」

「――ガングレド」

銀の尻尾を靡かせ、ユウはクツと顎を引いて前を向いて、顔を強張らせ強く床を蹴り歩き始める。

紅い瞳を細め、息を吐き出す――

「ありがとっ……一緒にいてくれて」

「……。隊長は皆の希望です」

「なら、早く終わらせないと……」

「——はいっ」

前を歩く大きな背中を見つめながら、黒い狼のガングレドは力強く頷いた。

やがて通路は扉をくぐりぬけ、吹き抜けを過ぎて壁が左右に広がり、その通路の隅に少し大きな扉があった。

扉の脇に設置された遺伝子リーダーに自身の手をかざしては、開く扉。

中は殺風景なものだっ

た。大きな机と本棚とベッドのみが設置された部屋。壁に大型のモニターが設置され、薄暗いライトが部屋を照らしていた。

総大将である、ユウ・アトラの部屋だった。

「あ、遅かったねユウッ」

「すまん、時間が掛かった」

入り口付近のボタンを押せば、ライトが付き、部屋の隅ベッドの縁に座りながら、小さな人影が見えた。

着こんだ白衣は床につき、ほっそりとした脚をプラプラと投げ出し、佇むのは小さな少女。

肌は真っ白で獣耳はなく、長い栗色の髪に蒼い瞳を浮かべ、そこには『人間』がいた。

十代前半の子供。

ニッコリと微笑めば、年相応の表情が見え、少女は床に足を下ろすままに部屋に入るユウに歩み寄る。

そして笑みを滲ませ、メガネ越しに苦々しく顔をしかめる狼男の目を覗きこむ。

笑みが深まる——

「……あんまり見るな」

「やだ」

「……ミア。戦況はどうだ？」

小さなため息と共に、ガングレドと共に部屋に入ると、ユウは机

の上に腰を落とし腕を組んだ。

少女は表情一つ変えず、彼のベッドの上に座り、壁にもたれるガングレドとユウを見比べつつ話し始める。

「まあメグロの施設を破壊したことで、都庁のシールドエフェクトは50%システムダウンしたね。」

後はシブヤの方にある地下軍事施設だね」

「そうか……ミア、メグロ戦での報告を聞きたい」

「戦死者は五名。エリス、ユウキ、タイレン、ジョージ、ピエール」
「すらすらとそう言っ、ミアと呼ばれた少女は白衣の裏から数枚の紙の束を取り出し、彼に手渡した。」

それは戦死報告書。

一人ひとり、どのような形で生き、どのような形でこの反乱軍に入り、どのような形で死んでいったかが克明に書かれていた。

皆若く、エリスは女の子で、最年少十五歳だった。

どの言葉も最後は『メグロ送電施設制圧戦にて戦死』と書かれていた。

皆、死んでしまった。

「ティツシュあるよ？」

「……最後に取っておくよ」

「仕方ないよ。メグロ戦の為に陽動小隊を五つも用意して東京の各地に送ったんだから、戦力の年齢がどうしても低くなるんだから。」

パイロット自体、というより獣人自体が減っているんだから」

「——陽動部隊はどうだ？」

「皆全員帰還したよ。怪我してる連中が多いけど、今は皆医務室にいるよ」

「後で俺も行こう。……弔いにもな」

「僕も付き合うよ」

「ありがとう……」

短く言葉を切り、ユウは小さくミアに頭を下げると、視線を黒い狼のガングレドに向けた。

「……。現存兵器の状況——というよりどれだけ弾薬を使つてどれくらいオルフェトを壊した？」

「本隊で中々に摩耗しました、とはいえ、半壊機は五機の身であり、後は簡易補修を行えばすぐにでも出せます」

そう言つてガングレドは手に持っていた紙の束を同じくユウに差し出した。

そつちはさらに細かな文章がずらずらと並んでいて——ユウは苦々しい表情と共に、ベッドに座る少女に手招きをした。

キョトンとなる蒼い瞳。

スツと立ちあがるままにミアはトトトツと小走りに駆けより、彼の差しだす報告書を手にとった。

そして、恨めしげな、少し困つたような表情を彼に見せ唇を尖らせる——

「何？またばくに読ませるの？」

「——俺バ力だから……」

「もう……オルフェトは五機半壊——さっきの五人の分だね。残りはそれほど壊れていないよ。」

使用した火器は……うん、弾薬が相当減つてるね。火器自体は超長距離圧縮重エネルギー波動砲が破壊されているね」

「後で俺が補充しておこう。重粒子砲の方はアトモス社に頼む」

「お願い——後は……ソレほど、かな？」

「何よりだ……」

トトトツ駆けてくる小さな足音。

疲労の滲む深いため息と共にユウは腕を組んで、手を差し出すとミアから受け取った報告書を机の上に置いた。

そしてガングレドとミアを見比べるままに表情を少し強張らせる。

「さて……今後の予定だが」

「隊長、そろそろシブヤの地下軍事施設を責める方が良いかと」

「……前回と合わせて、まだヨコハマの送電施設を破壊しきっていない。これで都庁に入れるか？」

「部隊を二つに分ければ或いは——」

「——わかった。俺が二でガングレドが八だ」

「隊長……真剣に考えています？」

「な、なんで疑う……」

ムツとする黒い狼のガングレドに、ユウは焦りに目を細めては、ただとどしく首を傾げた。

だがガングレドは深いため息と共にガクリと頂垂れるとあきれた様子で首を振った。

「……。私が全部隊の七割を牽引して送電施設を破壊します」

「ん、わかった。同時期がいいな。俺は部隊三割を率いてシブヤに攻める事にしよう」

「——こっちの守備隊はどうするのユウ？」

と、不思議そうに首をかしげていたミアに、ユウは顔を上げると小さく肩をすぼめた。

「……十五歳以下の子供達を守備隊に回す。その上での三・七分割だ」

「結構縮小するよ、大丈夫？」

「そろそろやってきて成功したのは今回だけだ。出来る限り早く終わらせ早く帰る」

「君は大丈夫だろうけど、ガングレドは平気？」

ムツと顔をしかめては黒い狼は目を細め、不思議そうに首を傾げる少女に、低い声で呻く。

「——これでも元軍人だ。小娘に心配される謂われはない」

「傲慢は人を殺すよ」

「肝に銘じている、だからこそ、七割の部隊を隊長より任せていたのだ」

「少なくない？」

「ごり押しはするつもりはない——私は隊長ではないのだから」
「だよな」

困ったようにペタンと垂れる尖った耳。

クスクスと笑う少女、そしてムスツとする黒い狼男の視線に、ユウは肩身も狭そうに首をすぼめた。

「……今後の作戦はこれでいいな……詳しい事は旗艦に戻って考えよう」

「了解です」

「じゃあ解散。俺は少し医務室に足を運ぶ」

そう言っただけ机の上から離れるユウを、ガングレドは小さく首を振って制止する。

「いえ。隊長は少しお休みください」

「疲れているように見えるか？」

「目が淀んでいます」

「……」

「いやな事があつたのでしよう。少し心を鎮めて次に備えてください。大将がそれでは式に関わります」

「……子どもたちに気取られたか？」

表情が少し強張り、自身の紅い瞳を手で覆うユウの姿に、ガングレドは小さく首を振った。

「いえ……ですが、貴方の疲労は組織全体の疲労に繋がります。どうかお休みを」

「……代わりに行ってくれ」

「御意」

「すまん……」

「私はこれで失礼します」

にこにこ笑い小さく手を振る少女を横目に、ガングレドは強張った表情のまま優に頭を下げ部屋を後にする。

自動で閉まる扉。

二人きりになり、ミアは項垂れる銀の狼男の横顔を覗きこんでは、無邪気に首を傾げた。

「ユウ……聞いてあげよっか？」

「——いや、いい」

「そつ。なら後でお酒持つてくるね。ユウの好きな甘いシャンパン」
「ああ……すまない、ミア」

「うっん。後で新型機の話もしたいからね。何かあったらぼくの部屋に連絡ちょうだい」

無言のままユウは小さなため息と共に頷く。

ミアはそれでも表情一つ変えず笑顔のまま、頷いて見せると白衣を翻し踵を返して小走りに部屋を出て行こうと部屋の扉の前に立った。

「……ねえッ」

自動で開く扉。

廊下へと足を一歩踏み出しながら、少女は白衣を翻し俯くユウへと向き合つと仄かに微笑んだ。

「二年前、君に聞いたよね」

「——」

「今度、答えを聞かせてほしいな——そう思っただけッ」

「……いつかな」

「うんっ」

ミアは部屋を出ていき、再び自動扉が閉まる。

零れる小さなため息。

ユウは首の後ろについたスーツのボタンに指を添えると、ベッドへと足を向けた。

身体を覆っていたスーツの上半身が縦に二つに割れ、覗かせるのは全身を覆い尽くす銀色の体毛。

薄いパイロットスーツを脱ぎ捨てるままに、ユウはベッドに身体を横たえては天井を見上げた。

「……タクト」

—— 瞼に映るのは、怒り狂った老け顔の青年の顔。

躊躇なくトリガーを撃つ仕草。

年齢以上に時間を重ね、心の苦しみに悶えながら、銃を向けるか
つての友人の顔が眼に映った。

彼の言葉が、耳に残った――

――殺してやる……！

彼の憎悪が、胸にこびり付いた。

――美沙は……美沙は死んだんだぞ！

自身の悔恨が、ただ胸の奥でぐるぐると渦巻いた。

――お前が殺したんだああ！

「……ああ」

のっぺりとした薄暗い天井を見上げ一人そう呟くと、ユウは体を横たえベッドの上に背中を丸めた。

少しでも長く眠ろう――彼は、強く目を閉じ、意識を闇の奥へ向ける。

それでも、闇の中に、彼はユウの前に立っていた。

ユウを睨み、銃を向けていた――

（……美沙……僕は……）

銃弾が飛んでくる。

頭に弾痕が浮かび、闇の深みへと身体と意識が吸い込まれていく。
どこまでも落ちていく――

九話目

——正しい事をしていると、到底思えるはずもなかった。
ただ、こうすることで、少しでも俺達が未来に近づけると思っ
てがむしゃらになっていただけだった。

平和な、誰も争う事の無い未来へと。

夢物語だ。

そんなもの、追いかけるだけ無駄なのに、俺は、追いかけた。
そんな俺の為に、今回で五人、前回で十人の仲間を失った。
皆、俺の為に死んだ。

俺は、彼らの為に何かしてやれたらうか。

俺は——何のために戦っているのだろうか。

美沙……。

なんで……死んでしまったんだ。

僕は——

夢を見た。

「隊長！ここですっ！」

ヨコハマ電力送電施設内。

沿岸に出来たメグロと同じく巨大なドーム状の施設で、山に囲ま
れたそこは正に自然の要塞だった。

当時は、メグロと違い強力な空間位相転移による防壁が張られて

いて、正直圧縮エネルギーによる重粒子砲でも貫くことはできなかった。

だからどうすればいいかと考えた時、俺は数人の仲間と共に潜入することにした。

それは、おそらく正しいだろう。

だけど、警備網は多く、中心部に爆弾を設置するために、多くの対人兵器、ロボットと戦い、俺達は疲弊した。

辿りつ頃には、仲間の装備はボロボロになっていた。

「……皆、大丈夫か？」

「ああつ、まだまだいけるさっ」

「少し弾薬が心もとないけど……なんとかあります」

「弾薬が少ない奴はこっちに来い。俺が補充する」

——クセリアス・アナトリウス。

十年前、俺がこの姿になって、使えるようになった『魔法』の一つで、これを使えば持つてる弾薬が自然に回復した。

ただ、これを使っても壊れた武器や装備を直せるものではなかった。

何より、仲間の心的な疲労は目に見えていた。

ここから地獄の復路をめぐるには、恐らく誰かが脱落することは容易に想像できた。

「……よし。爆弾を設置するぞ」

——その可能性を、俺は無視した。

「これでいい。……ガングレド、ガングレド！」

通信機に叫べど通信は届かない。

恐らく電磁障壁が張っており、これでは遠隔操作により爆発は起こせないだろう。

俺は仲間を見比べる。

——皆、少し困ったような笑みを浮かべていた。

「……やりますか、隊長」

制限時間を設けようにも、長ければ、敵に見つかり、短ければ仲

顔に降りかかり、真っ赤に染まっていくスーツと銀の体毛。

やがて真っ二つに敵が崩れるままに、ナイフを投げ飛ばしては、ナイフは光る粒子の尾を引いて飛び出した。

——アクスファラ・アトラシア。

強化したナイフは飛翔しながら空間ごと割り貫くように、掠めるだけで敵の腕や頭部を一瞬で血煙に変えた。

そして通路奥に突き刺さるナイフ。

紅い血飛沫が辺りにまきちらされ、警告灯に紅く染まる通路に黒く壁に滲んでいく。

かつての『人』がまた一人、死んでいく——

「……行くぞ！」

——迷いは許されなかった。

時間はなく俺は後ろに続く仲間を引き連れ、狭い通路を走り、事前に作成した脱出ルートそのままに走った。

マズルフラッシュに続いて弾丸が背後から掠め、敵を抉っていく。背中を押されているような気がして、俺はナイフを口に咥え、身体を屈めながら拳銃を二丁敵に突き出す。

薬莢が宙に舞い、身体を屈めて走る俺の肩を叩いて地面に転がる。敵を殺していけば、それだけ仲間が助かる。

だけどソレは『人』の数をさらに減らす事だった。

俺は、これでいいのか、俺は——

「あ、隊長！」

「……ああ」

考えを払い、ルート通りに進みながら。通路の向こうに、スポットライトの光が零れる夜の宵闇が見えてくる。

出口が近い。

時間も近い。

予断は許されず、俺は仲間を引き連れ、地面を蹴りあげヨコハマのドーム状の送電施設から飛び出した。

そしてうつすらと施設の周りを覆う光の膜を見上げる——

「……」

——軽く絶望した。

そこには出口の周りを塞ぐように、白い装甲のエルザが、辺りを囲んでいたのだ。

手には巨大なライフルを担ぎ、虚ろな蒼いアイサイトがじつとこちらを見下ろすままに、トリガーに手を添えている。

「……た、隊長」

——宙を舞う、巨大な空薬莢。

「エルクシュ——アルト・ラナフェル……！」

虚空に手を掲げるままに、光の円形の模様が手の平から広がり、大きな半透明の盾が目の前で弾丸を弾き飛ばす。

それでも止まぬ断続的なマズルフラッシュと、大量の硝煙。

立て続きに飛んでくる弾丸の雨に、身体が後ろに持っていかれ、背後に送電施設がそびえる。

掲げた光の盾の向こうには、廃虚の街が広がり、その中に迸るマズルフラッシュ、未だにガングレドの陽動部隊が戦っていた。

こちらには来れないだろう。

そして、制限時間は時を刻み続けている。

——時間がない。

焦りが身体を無理やりに動かす。

彼らを助けたい。

後ずさる仲間の前に立ちながら、俺は体を前のめりに屈めつつ再び歩き出す事にした。

光の盾の向こう、巨大な弾丸に身体を押し込まれながら、それでも爪を食い込ませ、地面を蹴りあげる。

仲間の下に帰る。

彼らを生きて帰す——

『ユウうつうつうつうつ！』

——聞こえてくるのは、懐かしい声だった。

怒りが滲みしやがれた、潰れたようなソレでもわかる。

およそ、十年ぶりの声だった。

あの日、生き別れた友達の声だった。

あの地獄の日に、姿を消した——いや、彼の下から俺が逃げて、隠れていたはずなのに。

彼は追ってきた。

白いエルザに乗って、俺の前に立っていた。

大型の対物狙撃銃を担ぎ、肩にガンランチャーとミサイルポットを装備して、青ざめる俺に向け、立っていた。

「……タクト……」

『殺してやるうううううう！』

——気が緩んでしまった。

ミサイルの爆発と大口径のガンランチャーのマズルフラッシュは、掲げた光の盾を一瞬で剥がしかけた。

それ以上に、重たい衝撃に身体が軋み、膝をついてしまう。

ぎりぎりとの平を掲げた右腕の骨が悲鳴を上げる。

光の粒が飛び散り、薄っぺらい光の膜の向こうに、爆風が噴き上がり、弾丸が爆炎の中で突き刺さる。

ダメだ。

このままでは俺の力でも防ぎきれない。

仲間が殺される——

「お前ら！一旦建物に隠れろ！」

引くに引けない状況の中、俺は巨大な爆弾の中に隠れと、無茶な指示を後ろの同胞の出した。

囲われている状況で、それでもこの弾幕から身体を隠れさせるには十分だ。

彼らを助けないと。

彼らを——

「隊長を助ける！皆撃てえええ！」

——振り返れば、そこにはライフルを掲げ、トリガーを引く仲間がいた。

皆、真剣な表情で弾幕の向こうにいる、パワードスーツに銃撃を始め、或いは手榴弾を投げつけていた。

こちらの弾丸は光の膜を通り抜け、敵にあたり、小さな爆発に一機のエルザの足が破壊されその場に崩れ落ちる。

それでも敵の弾幕は止まず、仲間は崩れ落ちる俺の肩を支え、銃を撃つ。

弾幕を作り、道を作ろうとする――

「隊長！隊長だけでも逃げてください！」

「――ダメだ……ダメだ！」

「……僕らは死ぬんじゃないやありません。次につなげるために、皆が幸せになるために戦うんです！」

「隊長、言ってくれましたよね。俺らを幸せにしたいって、皆で平和な場所に行くんだって」

「……こんな姿になった僕らにほほ笑んでくれたのは隊長です」

「一緒に生きようと言ってくれたのは隊長です」

「俺らを気遣い、こんな世界に居場所をくれたのは隊長です」

「僕らは――隊長の信じる未来を信じます……」

――皆、微笑んでいた。

「……隊長一人なら、ここから逃げられます」

「――生きて、皆を未来に導いてください」

「ユウ隊長ならそれができる――行ってください」

光の壁にひびが入る。

もう耐えられない。

逃げてくれ、逃げてくれ――どうして、俺なんかのために、俺の為に笑ってくれるんだ。

俺は――

「隊長、生きて――」

光の壁が破られ、吹き飛ばされる俺の身体。

仲間は、流れ込んでくる爆炎の中に消えた。

霞む視界の中、皆、最後まで笑っていた――

『ユウウウウウウッ』

拓斗の地獄から噴き上がるような声が、爆炎の中にいつまでも響き、直ぐさま弾丸が俺の方へと飛んできた。

俺は、地面に節々を打ち付け痛む身体を引きずり、走った。

仲間を見捨て、ここから逃げようとした。

程なくして、送電施設から大きな爆発が起きた。

施設の周囲を覆うバリアフィールドが消失し、爆風と共に俺の身体は空高く吹き飛ばされた。

最後まで、タクトのうめき声が聞こえていた。

仲間の言葉が、頭の中にグルグルと渦巻いていた。

——この日、第一次襲撃作戦は、失敗した。

結果から言うなら、ヨコハマ送電施設は、未だ最低限の機能を残したままだった。

送電機能を切り、都庁を制圧しなければ、この作戦は成功しないのに、俺は第一手からして失敗した。

最低だ。

最低な大将だった。

仲間を見捨て、作戦は失敗し、何もできずに、俺は気がつけば、送電施設の周辺都市の廃虚に身体を投げ出していた。

およそ七百メートル、夜空高く飛ばされ、そして地面に体をぶつけたようだ。

それでも、身体の節々が痛んでいるだけで済んだ。

俺だけが、生きていた。

「……ハヤト……アニス……ミーシャ……オードリー……」

宵闇をかき消すように、赤々と炎が送電施設から立ち上り、深い夜天を真っ赤に染め上げていく。

黒い灰が空へと昇り、海風に消えていく。

俺は——

——生きてください、隊長。

頭の中に、彼らの声が聞こえた。

彼らは記憶の中で、ただ優しく微笑んでいた。

俺は、ただこえなく涙を流し、昇る炎の明りに目を細め、立ちつくしていることしかできなかった。

——その日、俺の仲間が十人死んだ。

皆、大切な仲間だった。

こんなくそつたれな世界に生まれた、誰一人手放す事の出来ない仲間だった。

十話目

「……起きた？」

——気がつけば、涙があふれていた。

目を開けば、そこには薄暗い天井と少し広い部屋が、滲んでぼけた視界に映った。

ベッドのそばに誰がいる。

霞んだ眼を擦れば、そこにはメガネを掛けた栗色の髪の少女が微笑んでいた。

手には大きなボトルが一つ。

そしてグラスが二つ。

「一緒に呑もう？」

表情を崩さず、少女、ミアは静かにそう告げると、ベッドの縁に座りながらユウに囁いた。

ヒクリと尖る耳。

ムクリと巨軀を動かし起き上がれば、微かに関節が軋みを上げ、特に肩に痛みが走りユウは顔をしかめ肩を押さえる。

自身の身体を見下ろせば、まだ着替えていないようで銀色の体毛を帯びた上半身とスーツを着た下半身が見えた。

床に投げ捨てたはずのスーツの半身はすでになく、ユウは寝ぼけた目で隣に座るミアを見下ろす。

「……すまない」

「えへへっ。泣いてる」

「……ああ」

涙が伝った痕が、体毛の濡れた痕となって突き出た鼻筋の根元を

伝い、銀の狼は静かに目尻を拭った。

スクツと立ちあがる華奢な体。

両腕にシャンパンのセットを持ちながら机の上に、ミアは楽しそうにシャンパンのコルクに手を添える。

ポンッ……

何もせずとも、自然と零れるコルク。

泡が口の端から零れ、少女はグラスに白いシャンパンを注ぐとユウに差し出した。

「はい」

「……何か、用があつたのか？」

「ううん」

優しく首を振る少女。

ユウは小さなため息と共にグラスを受け取ると、僅かに開いた口腔へと白い液体を流し込んだ。

裂けた口の間から僅かにシャンパンが溢れ、銀の体毛が濡れた。

「……甘い」

「おいしいでしょ」

「……今どこだ？」

「もう少しで旗艦『アストライア』だよ」

シャンパンを注ぐ音、泡の爆ぜる小気味いい音が部屋に響く。

自身のグラスに白く澄んだ液体を注ぎ、ミアはこちらに振り返ると、再びベッドの縁に腰を下ろした。

そして紅い瞳をメガネの奥に覗かせながら、ユウの真紅の瞳を見つめる。

眠たそうに細めた狼の目に、優しく微笑む――

「――少し眠れた？」

「ああ……」

「いやな夢だった？」

「……。ああ……」

「よかった」

それだけ囁くとソツと少女はユウの大きな毛むくじやらの手に自身の手を重ねてコツリと肩に頬を寄せた。

そして足をパタパタと前後に動かし、天井を見上げる。

そんな嬉しそうな少女の横顔を、ユウはグラス片手にぼんやりと見下ろす。

「どうしたんだ？今日はとても近いな」

「ううん——ただ、昨日の君は、とても寂しそうだったから」

「……」

「夜明けが近いね」

「——昨日、友達に会った」

「よかったね」

「ああ……敵だったが、それでも元気そうだった……」

「うん」

「あいつは何人も仲間を傷つけた。何人も仲間を殺してきた」

「うん」

「……だけど、それでも生きている事が心のどこかで嬉しく感じていた。同時にひどく憎く感じていた」

「うん……」

「俺は、どうしたらいいんだろうな」

「——前に聞いたよね。君はなぜ戦うのかって」

少女は優しく微笑みながら、そう尋ねた。

ユウはハツとなって紅い瞳を見開き、ぐりぐりと顔を擦りつける少女のあどけない笑顔に表情を曇らせた

「なぜなの？」

「……。わからない」

「うん」

「未だに——はつきりとわからない。相手を殺したいのか、戦いを終わらせたいのか……」

「うん。またいつか答えてくれたらいいよ」

「すまない……」

「うっん。君の自由にしたらいい。ぼくは君に従うよ」

変わらず少女は微笑んでいた。

「あ、そうだ。新型機なんだけどね、もう少しで出来上がるってアトモスから連絡があったんだ。」

二週間後には『アストライア』に搬送できるんじゃないのかな？」

「俺の、か？」

「君の専用機だよ。魔法を使う異端の『獣人』の君のみが操れるゴーレム、生きた機械——君と同じ命を持つもの、魂の器」

「……ソウルオーブ、だったか？」

「覚えてるよね、多分ユウも」

「……あのビルの地下にあるでかい石か」

「そして、この世界を作った元凶」

「……」

「動力として組み込んでる物としては、今のオルフェトの五倍ぐらいかな？それでも君の考える作戦には支障はまったくないけどね」

「よかった……」

「都庁襲撃作戦には間に合うんじゃないかな？納期を一カ月も送らせてるのが正直あたまにくるけど」

ムスツと口を尖らせながらチビチビと口にシャンパンを付ける少女に、ユウは困ったようにうつすらと笑みを滲ませた。

そして宥めるように、彼女の栗色の髪を撫で、笑い声を含ませる。「ふふっ、迷惑を掛ける……」

「ほおんとっ。ぼくらにも計画つてものもあるんだからさっさと仕事してほしいよねノロマ会社は。」

それでいて武器はまた別段階で作ってる段階って絶対バ力にするんだけど。

君の要望通り、内蔵兵器中心でよかったよ。これで丸腰同然の納品とかそれこそアトモス社襲撃せざるを得なかったよお」

「ああ……」

「はあ……都庁襲撃——君の要望通りに進めるよ？」

「ああ。『アストライア』もソレ用に調整を進めておいてくれ」

「うん。君はぼくが絶対に殺させないよ。もちろんみんなも、ぼくが設計した兵器が皆を助けるよ」

「——ありがとう、ミア」

ユウはそう言っ て少女の手を強く握りしめた。

紅い瞳を細め、強く彼女の鉄目を食い込ませる。

少女はハツとなって目を見開くと、慌てて顔を伏せては、ちびちび飲んでいたシャンパンのグラスを唇で食んだ。

「……あんまりそういう目で見ないでほしいな」

「……？」

「いいよ。君はそういう人間なんだから……」

「——す、すまん……」

「いいだッ。慰めに来て損したッ」

そう言っ て、シャンパンのグラスをユウに押し付けると、ミアは白衣をバタバタとさせて部屋の入口へ飛び出した。

ユウは戸惑いながら、彼女の背中に手を伸ばそうとする

「お、おい……」

「——もう……ペース狂うなあ……」

「……？」

「帰るッ。『アストライア』に戻ったら次の作戦考えるよ！」

「お、おう……」

少女はそそくさと部屋を後にして出ていく。

そして閉まる前に、扉の前に立っていた人影にギョッとし立ち止まり、ミアは更に速度を上げて通路を歩いて行った。

人影はムスツとした表情もそのままに、首をかしげつつ部屋へと入る。

「……ミアは何かあったのでしょうか？」

「俺を慰めに来てくれた、と……」

黒い狼のガングレドは、表情は変えず合点がいったように目を見開いては、小さく頷いて見せた。

「いいコンビですな……」

「——まあ……これでも十年來の付き合いだからな」

「腐れ縁は、私よりも上ですか」

「……そうだな」

「恋人、とはまだ呼べないようですがな」

——胸を走る僅かな痛み。

「……。茶化すなよ」

零れる熱つぼいため息。

ユウは俯くままに、グツと胸元の体毛を掻きむしると、表情を強張らせるままに立ちあがりガングレドに向き合った。

「何かあったか？」

「オルフェト及び各種兵器の改修状況を知らせにきました。後医務室に行きましたが隊長に来てくれとアリシアにごねられました」

やれやれとあきれた表情を滲ませるガングレドに、ユウはキョトンと目を見開いては、程なくして可笑しそうに肩を震わせた。

「あははっ……わかった。すぐに行くよ」

「後、戦死したメンバーの葬儀についてですが」

「『アストライア』についたら執り行う。それまでここで準備だけはしておこう」

「はい」

「……。皆で見送ってやらないとな」

「申し訳ありません、細々とした報告のみで」

深く頭を下げるガングレド。

ユウは小さく首を振ると、壁の隅に埋め込まれたクローゼットに手を伸ばし、服の袖に腕を通した。

「いいさ。お前の声が聞けただけでも、俺は嬉しい」

「隊長……」

「——ヨコハマ戦……まだ早いが、お前に仲間の命を預けるぞ」

「全力で戦い、全員で帰る——貴方が告げた言葉のままに」

「ああ……」

ズボンに銀の尻尾を通し、ユウは踵を返すと、ガングレドと共に自身の部屋から通路へと一步を踏み出した。

通路は明るく、ゴンツと水が装甲を叩く音が静かに響く。

まだ水の中なのだろう——ユウは尖った耳を震わせ、海流のさめ氣に目を閉じながら心地よさそうに口の端を歪めた。

——もう少ししたら『家』に帰れる。

そんな機体を僅かに胸に膨らませ、ユウは医務室へと通路を歩いた。

「あ、ユウ隊長ッ。みんなみんなっ隊長着てくれたよっ」

「こら声を小さくしろ。寝ている奴もいる」

「……えへへっ。嬉しい、来てくれたんですね」

「お前がごねるからな」

——美沙の事……忘れたのかよ……！

忘れたわけじゃなかった。

あの日の事を、忘れられるわけがなかった。今でも、夢の中にお前達が現れて、胸を強く締め付ける。

「お、隊長じゃないですか。なんですか？俺ら中年の裸体でも見に来ました？」

「目が腐るからそれだけはやめろ」

「結構傷つきますねそれ……」

「お前らが女だったらなあ……」

「あははっ、奥手のくせして何をおっしゃるのやら」

「！？」

「聞いてますよ、またミアちゃん夜這いに言ったのに、何一つ手を

つけなかつたんでしょ」

「……ただ腐れ縁だよ」

「にひひひつ。やっぱ俺らの裸体が狙いなんですよ知ってますよ」

「やめて……」

ただ、それでも今を生きないといけない。

俺は『獣人』で、タクト、お前は『人間』だ。戦うと言われたら、おそらく無理な関係だろう。

人と獣人の溝はそれほどまで深まった。

それ以上に、人類は減りすぎた。

「ちよつとお、隊長は私のお嬢さんになる予定ですからねッ！」

「あ、無理無理。ユウ君は今絶賛予約枠いっぱいでありシアちゃんみたいな小さい胸じゃどう考えても」

「ていうかあんまり釣り合うようにも——」

「うっさい筋肉ダルマども！今度口利いたらぶち殺すぞ！」

「……すみません……」

「敵より怖いっす……」

——俺は別に『獣人』の未来を救いたいわけじゃない。

ただ、俺の周りにいる、仲間を平和な未来へと一緒に歩いていきたい、そう考えているだけだ。

美沙は、そんな俺を許すのだろうか。

俺は——

「隊長、泣いてます？」

「——お前らが生きてくれて、嬉しいんだよ」

「……。えへへっ、今度も生き残りますよ」

「ああ……俺が死なせない」

「私も、絶対に隊長を、皆を死なせやしませんからっ」

「あ、俺も」

「俺もだ、隊長にずっと付いていくぜっ」

「ありがとう皆——すまん、しみりさせてしまって」

「おしつ。じゃあ俺がなんかやりますよ。隊長見ててくださいねっ」

「ああッ」

静かな医務室が騒がしくなっていく、やがて医療班の人間に怒られるまでの少しの間俺達は笑い声を交わし続けた。

これは最期じゃない。

未来を繋げるために、明日も笑っていられるように、ずっと。

生きていこう。

その為に——戦おう。

十一話目

今日は、相当僕はそわそわしていた。

「夕……なんか今日顔を紅くないか？」

「う、うんにゃ……」

机に顔を突っ伏しながら、クラスメイトに話しかけられて慌てて僕は顔を伏せた。

自分でもわかってる。

すごい緊張してるって。

手の先からつま先までびりびりってなんだか痺れて、胸はバクンバクン跳ねあがって頭は朝から真っ白になって、目は潤みっぱなしだった。

今朝、下駄箱に手紙を置いてから、身体がおかしくなりそうだった。

まだ二時間目なのに放課後まで耐えられるだろうか――

「うつ……やばいかも」

「何がだよ……」

「――拓斗……いる？」

「うん？いつもの場所じゃないのか？」

そう言えばそうだった。

いつも三人で、僕は校舎の中庭のベンチに座って、一緒にご飯を食べるのが日課だった。

多分、拓斗は先に行ったんだろう。

美沙ちゃんと一緒に、僕を待っているんだろうか――

「……はあ」

――美沙ちゃんの手が笑顔が頭に浮かぶ。

それだけでまた頭の中真っ白になっていく。

振られるかもしれないのに、僕はバカだ、本当にバカで単純で何も考えなしの無謀の塊で。

それで――

「あ……」

――ドオオンツて心臓が跳ねあがった。

たった一声なのに、僕の身体は机に突っ伏しながら、火のように熱くなって石のように固くなった。

「えと……お兄ちゃんどこに行っただか知ってます？」

「ああ、拓斗。えとお前ら三人と一緒にじゃないのか？」

「うん、そうなんですけど」

息ができない。

心臓が跳ねて跳ねる。

「部活じゃね？まあ探せばすぐ見つかるさね」

「う、うん……ありがとう」

彼女が傍にいる。

すぐ傍にいる――

「あの……夕君」

「――」

背中を軽く摩る感覚。

突っ伏しながら、もう息ができなくて、彼女が何を言っているのか半分も頭の中に入って来なかった。

ただ、聞き取れた言葉もあった。

「――屋上……放課後で待ってるね……」

頭の血管が切れそうだった。

彼女の少し荒い息遣いが聞こえる。

踵を返しながら、スカートが揺れる机の角に擦れる音が聞こえる。

。

少し恥ずかしそうに彼女の足音が聞こえる。

彼女の姿が瞼の中でも奥にハッキリと映る。

今すぐ会いたい。

あつて伝えたい。

ああ、なんでぼくは『放課後に会いましょう』なんて文章を最後に手紙に書いたんだろうか。

会いたい、伝えたい――

「くううううう！」

「――お前なんか今日怖いわあ……何をそんな力どるんや？」

ガンガンと机の脚を蹴り、興奮を抑えながら、僕はただただ時間を過ぎるのを待った。

そして時間はゆっくりと、だけど確実に過ぎていった。

五時限目。

六時限目と時間は流れていき、気がつけば掃除をしながら見上げた時計は午後三時半を指していた。

指定した時間は四時半。

はやく終わらせないと。

僕は疾風の如き速さで掃除を終わらせ、机を並べ直し、躓きそうになりながら教室を飛び出した。

「あ、おい夕」

「ち、ちよつと行ってくる、ごめんっ」

「……。いや、頑張れて言いたかっただけなんだが」

――思えば、あの時、チョコレートを渡し損ねていた。

俺にとつて、心残りの一つだった。

屋上についた時、夕焼けが眩しかった。

空は恐ろしくくらいに茜色に染まり、遠く、海の方こうへと夕日が沈んでいくところだった。

もうすぐ四時。

待った時間は体感的に長く、その場で何度も足踏みをしながら、俺はあの日、あの屋上で待ち続けた。

「……え？」

世界が終るその日。

その瞬間、茜色の空を挟み海とは反対方向の、都会の街、東京の方向から紅い光が真っ直ぐに空へと昇った。

紅い光の柱は徐々に中太りしていき、やがて大きな球体が空と地を繋いだ柱の真ん中にできた。

そして、破裂する紅い球体。

血しぶきは、真紅に空全体を染めていき、うつすらと波紋のようなものが東京を中心に世界へと広がった。

校舎の頭上を一瞬でよぎり、次の瞬間、茜色の空が紅く染まった。血のように紅い空が、血のように紅い空気がこの地球全体に広がっていった。

——ゴーン、ゴーン……

四時のチャイムが鳴る。

世界崩壊の始まりを告げる大鐘が街に響く。

程なくして、断末魔にも似た悲鳴が校舎の中に響き渡り、校庭の中にいた人影が次々とその形を失っていく。

そして別の姿へと形を変えていく。

学校に『異人』が現れた、今日はその最初の日だった。

十二話目

『アストライアに着艦しました。各員降りる準備をして搭乗口に集合してください』

太平洋の真ん中。

蒼い海に揺られながら、滑らかな装甲を纏い、巨大な船が漂い浮かんでいた。

丸みを帯びた流線型の艦。

継ぎ目を一切見せない程に純白の装甲は滑らかに海の水をはじき、光の粒子が装甲表面から噴き上がる。

窓は一つもなく、細長い卵を彷彿とさせる船は背部に宇宙航行向けの大型スラスタバーニアを三基装備し、先端に航空機などを発進させる滑走路のように長いデッキが取り付けられていた。

海に浸かった底部は中型の艦、エルドラドを収容する程に大きな搬入口が設けられ、その姿は宇宙船のように大きかった。

搬入エリアから排出される海水。

やがて海水の中から灰色の大きな船が、床と天井から迫り出すハンガーによって固定され乗降デッキが床から迫り出してくる。

そして分厚いハッチが開き、出てくるのは何十人と言った獣人。彼らを迎えるのは、海水の排出された搬入口エリアに集まっていたその何倍もの獣人の人影だった。

その数は数百人。

皆、顔や体の一部が異人しているものの、その目は幼く、或いは見えぬほどに衰えていて、皆年端もいかない子供や老人だった。

或いは手や足が一部欠損していた不自由な人たちだった。

ここは旗艦『アストライア』

収容人数二千五百人。

世界の獣人のうち多くが集まる、反乱軍にとっての白き箱舟だった。

「皆……嬉しそうだな」

『ええ』

部屋のモニター越しに搬入エリアを見つめながら、そこには抱き合う獣人達が見え、或いは喜び合う人達がいた。

皆嬉しそうに声を上げ、反響が広大なエリアに響いていて、ユウは自分のことのように口元を綻ばせると、通信マイクを口元に添える。

「皆降りたか？」

『後は居残りの整備班のみです』

「迷惑を掛ける……少し挨拶に行ってから降りることにするよ」

『はい』

ダッフルバッグを肩に担ぎ、ユウは部屋を後にしてオルフェトの収納ハンガーへと足を運んだ。

「皆ッ」

収納ハンガーエリアに響く張り上げた声

そこには『エルドラド』の搬入口へと運ばれるオルフェトがあり、その傍に整備員の姿が見えた。

皆歩み寄るユウに手を振っている様子が見え、ユウは彼らの仕事場から少し離れた所から叫ぶ。

「ありがとうッ、皆！今後また戦いは続くかもしれない、皆が培った技術と経験をその時の為に。

頼りにしている、皆！」

『ハイッ』

「先に船を降りる、皆も仕事を終わらせ次第船を降りてくれ。船の修理は居残り班にやらせる！」

以上だ、手を止めさせて済まない！」

『了解です隊長!』

大きく手を振る人影が、上部の吹き抜けの通路から見下ろせ、ユウは同じように大きく手を振ると、踵を返した。

少し後ろ髪を引かれるような思いを胸に抱きながら、ユウはそのまま搭乗ハッチへと足を運ぶ。

「少し疲れているだろうか……」

『緊張しているんですよ、隊長に声を掛けられて』

「俺はアイドルではないのだから……」

『鏡をご所望ですか?』

「なんでだ……」

「——遅いッ」

通路に響く怒号に、ペタンと垂れる耳

搭乗ハッチに足を運べば、そこにはメガネの奥に恨めしげな視線を覗かせるミアが立っていて、ユウは気まずそうに首をすぼめた。

「ん……何かあったのか?」

「もうつ、皆待ってるよっ」

ヒクリと尖る片耳。

そう言つて駆けてくる少女の下に歩み寄ると、ユウは突き出た鼻筋を指で掻きながら不思議そうに首を傾げた。

「何が?」

「こっち!」

毛深い手を引っ張られるままに、ユウはハッチを飛び出し、差し込むライトの明りに目を細める。

——轟く歓声。

思わず尖った耳を閉じてしまう程の声の群れ。

皆、こちらを見上げ、自分のことのように嬉しそうに叫んでいた。惚けるユウの名前を、或いは涙を流しながら叫んでいた。

「皆……」

「君を待っていたんだよ。ほら、あいさつしないとっ」

「……」

戸惑いにキュツと丸まる尻尾。

ユウはキョトンと目を丸くしながらも、ミアに連れられるままに乗降エスカレーターを降りていく。

そして駆けよる人達の群れに向き合いながら、彼らと手を繋いでいく。

「ユウ様ッ、よくお帰りになれましたッ」

「本当に御無事で何よりです……」

「聞けば十何機の敵エルザを破壊したとか、本当にユウ様の御武運は天に轟くものかと……」

「僕謀報部のお兄ちゃんに聞いたッ。先生凄かったんだって」

「紅い目のオルフェト格好いいよッ。僕も大きくなったらあれに乗るの、先生みたいにあれに乗って一杯戦うのッ！」

「あ、私もっ紅い目のオルフェト乗るッ」

「私も先生みたいに戦いたいッ！」

そう言ってユウの手を強く握る老婆、或いは子供たちが人の群れの中に見えた。

皆、ユウの下に足を運びながら、それでも体の弱い人達を気遣っている様子が見え、ユウは膝を折り、彼らの目線で優しくほほ笑んだ。

「ありがとう、皆……ただ、俺のまねをすると、ガングレドが目を吊り上げて怒ってくるから覚悟しておけよ。」

ガングレドは怖いからな……」

『ハアイツ、先生ッ！』

「ったく……」

ユウは小さく肩をすぼめるままに、彼らに両腕を引っ張られながら立ちあがると辺りを見渡した。

——ヒクリと動く鼻先。

漂うのは、少し哀しげな匂い。

視線を動かせば、そこには一人輪の外で、一人の獣人に付き添われながら佇む老婆の姿が見えた。

どこかヨロヨロトしていて、目も開かないようで、杖をつきながら優しくこちらを見上げていた。

「……皆、こっちへ」

銀の狼は紅い瞳をスウと細めるままに、子供達、老婆を引き連れるままに、輪の外にいた老婆の下へと歩み寄った。

「お婆さん……」

「——おや……いい声だねえ……心が洗われるようだよ……」

「でしょう。……帰ってきましたよ」

「お帰り……よお生きて帰ってきたねえ……」

そして毛深い手を摩れば、弱った耳を尖らせ微笑む老婆。

体毛に覆われた顔の肉は僅かに垂れ、心音は弱々しく、それでも杖について一生懸命生きている。

ゆっくりと開く手の平。

手の平の体毛から噴き上がる光の粒。

舞い上がる光はまるで生きる蛍雪の如く——ユウはソツと老婆の目下に指先を添えては息を吸い込んだ。

目を閉じ闇の中に輝く光を覗く——

「エトリア——アストライア……」

ゆっくりと開く紅い瞳。

手の平に浮かんだ円形の模様が小さくなって閉じた手の中に吸い込まれ、ユウは老婆の顔を覗きこむ。

——ゆっくりと開いていく瞼。

そこには光を映す老婆の綺麗な黒い瞳があり、銀色の狼をハツキリと捉えていた。

「……お婆さん」

「おお……見える……」

「……よかった」

「——あ、あんたが、ワシに光をくれたのかい……？」

「……」

自身の口元に添える人差し指。

ユウはゆつくりと立ちあがるままに、戸惑う老婆に優しく微笑むと無言のまま頭を下げその場を後にした。

そして遠くで手招きするガングレドに呼ばれるままに歩いていく。

「今行く」

「……ありがとう、本当に…… 本当に」

「——俺こそ、ありがとう……」

やがて咽び泣きながら深々と頭を下げる老婆を横目に、ユウは後ろについてくる獣人に振り返って叫んだ。

「出迎えてくれて本当にありがとう。俺はこれからまだ残った仕事を片付けたい。皆は他の人達に対しても祝ってあげてくれ。」

もちろん、これから搬出されるオルフェトを見ても構わない。

但し、子供達は消灯までに帰ること、でないと担当教師にきつい罰が飛んでくるからな」

『はい!』

広大な搬入エリアに響く大きな返事。

あまりの大きさに尖った耳を垂らしつつ、ユウはこそばゆそうに首をすぼめ、踵を返し再び歩き出した。

そしてエリアの隅、ガングレドとミアと共に人用のエレベーターに乗り、上層へと上がっていく。

「……ふう」

「お疲れ様です」

そう言っただけの間にかダツフルバッグを担いでいるガングレドから、荷物を受け取るとユウは照れくさそうに笑った。

「……お前か?こんな真似をしたのは」

「いえ。貴方の武勇を伝えたのは、貴方自身ですよ」

「……俺は何もしていないさ。仲間を何人殺したのやら」

「しかし、そのおかげで作戦は進む——貴方の信じる未来が近づいてくる」

「礎にしたつもりはない。……皆、大切な仲間だった」

そう言つて静かに視線を落とす銀の狼に、ガングレドはハツとなるままに僅かに視線を外した。

「――口が過ぎました、申し訳ありません」

「いい、お前の言う通りでもある。……葬儀はいつやるんだ？」

「十時間後に」

「わかった、それまでに戻る。……弾薬庫に行こう、弾薬の補充をしておかないとな、ミア」

止まるエレベーター。

入り口が開き、長い尻尾を靡かせると、銀の狼はガングレドに小さく手を振り、少女と共に匡体を降りて行った。

そしてその大きな背中が通路の奥へと消えていく。

ペタリと垂れる長く尖った耳。

クシヤリと手持無沙汰に頭を搔くと、黒き狼のガングレドはもどかしげに顔をしかめ頂垂れた。

零れるため息は重く、肩をすばめ愚痴が零れる。

「まったく……優しいお方だ……」

――その優しさが、彼の望む未来を殺すかもしれない。

或いは――

「……タクト……あの男が」

胸をよぎる深いざわめき。

それは、憎悪のような感情。

或いは粘りつく嫉妬にも似た――

「……くそっ」

身体をめぐるドロドロとした何かに、目を細め、ガングレドは顔を上げると、固めた拳ポケットにねじりこんだ。

そして匡体の壁に後頭部を軽く打ちつけては天井を見上げる。

「守ろう……何があってもあの方を」

――あの日、ヨコハマで守り切れなかった汚名を返すためにも、悔恨を胸に収め、ガングレドはエレベーターで上方へと昇ってい

く――

アストライア内。

上層の躁艦ブリッジに戻るユウを、十五人のクルーメンバーが一斉に揃って立ち上がり一斉に頭を下げた。

『お帰りなさい、隊長』

「……崇められるのは嫌いだ。皆、持ち場に戻ってくれ」

ユウは小さく手を上げると、ブリッジクルーは再びシートについて目の前の危機に向き合う。

一人を除いて――

「お帰りなさい、ユウ殿」

そう言って被っていた軍帽を脱いでは短く突き出た耳が頭から露わになり、熊のように大柄な獣人は深く頭を下げた。

その体格は視界を遮る程に大きく、見上げるばかりにユウは微笑みを滲ませ、スツと毛深い手を差し出した。

「ジーク。ありがとう艦を守ってくれて」

「艦長として為すべきをしているまでです。お気になさらず」

そう言って差し出された手に強く握手を交わすと、ジークと呼ばれた大柄の獣人は軍帽を頭に被った。

そして柔らかな笑みを浮かべる銀の狼の顔を覗き込み、その老けた顔に皺を浮かべる。

「ガングレッドはどうですか？ワシの好とはいえ少し扱いづらいでしょう」

「まさか。ミア共々よく俺を支えてくれるよ」

と、隣に立って嫌そうに顔をしかめつつユウの後ろに隠れるメガネの少女に、ジークがキョトンと目を丸くした。

「……そのちっこいのが？」

ジークはそう言つてミアの傍に立つ銀の狼の不思議そうに細めた目で見下ろし、少女と交互に見比べる。

そして、ニィと大きな牙を覗かせると、顔を上げて軍帽を深く被る。

「——まあ、深くは申しませんよ」

「んん……そうか？」

「くくつ……して。ブリッジにお越しになられるとは」

「艦の様子を聞きたくてな。……後オメガチームを見かけたかなと思つて」

「もうすぐ来ますよ。あなたがこちらにお越しなると連絡を入れましたんでね」

と背後で開くブリッジの入り口。

走つてきたのは、同じく獣人でパイロットスーツを着込んだまま、振り返るユウを見上げては目を輝かせた。

「あ……ユウ隊長ッ！」

「フォルテ、アリア……！」

腕を伸ばし飛び込んでくるブロンドの体毛の獣人二人に、ユウは仄かな笑みを滲ませつつ抱きつかれるままに後ずさつた。

「あはははっ、やったあつ、ようやく隊長に会えましたっ」

「アリア……本当に久しぶりだ。二年ぶりじゃないかな」

「だって僕らがこつちに戻つてきたときには、隊長出撃してる時が殆どなんだからっ、会う機会全然なくてっ」

「フォルテ痛い……こら……」

そう言つてグリグリと身体を擦りつける獣人の兄妹を引き剥がすと、ユウは戸惑いがちに二人を見下ろした。

どちらもユウと同じく狼頭の獣人で、潤んだ目はまだ幼く銀の狼を見上げながら、尻尾を左右に振っていた。

束になつた資料を持つ手はどちらも小さく、ユウはグイッと両手を差し出す二人から資料を受け取った。

「はいっ隊長」

「オメガチーム、フォルテ、アリア、ヨウイチ、ヤンファ、ただいま帰りましたッ」

「て言ってもエルドラドの着艦の五時間前に私たちジークさんに拾ってもらったんだけどね」

「俺の方が遅刻か……方なしだな」

「えへへっ、私たちの勝ちい」

そう言っておかしそうに笑う二人に、苦笑いを滲ませつつ、ユウは二人の頭を労うようにそっと撫でた。

「オメガチーム、よくやってくれた。何より生きて帰ってくれて……」

「だって隊長いつも言ってるもの、生きて帰ってきてっ」

「頑張ったよ僕ら。隊長の言いつけも守ったもの」

「——本当に、よくやってくれた」

『えへへっ……』

そう言っただけで照れくさそうに笑う二人に、ジークは苦い表情はそのままに腕を組んでは肩をすばめた。

「ほらお前達、ちゃんと報告しなさい」

「あ、はいっジークおじさん——えっと、僕ら今回はオーストラリア大陸に南下して生存者を捜してきました」

「数は人間二百人、獣人が百人いました」

「残って戦うと言う人もいましたので、大体七十名の非戦闘員の獣人を集め、アストライアに乗せました」

そう告げる二人の言葉を、報告書の内容と共に確認すると、ユウは少し強張った顔を上げ小さく頷いた。

「ありがとう。よく集めてくれた。他の人員回収チームは既に戻っている。お前達も休んでくれ。」

詳細は後で見せてもらうよ、フォルテ、アリア

『ハアイ!』

「——私見だが、残った人達はどうしたんだ？」

踵を返し、ブリッジを出ていく二人を人きとめるユウの言葉に、

ブロンドの体毛の二人は難しそうに眉をひそめた。

そして互いに互いの顔を見比べ首を傾げて、歯切れの悪そうにつぶやいた。

「えと……よく、わからないけど」

「戦力は互角だったと思います。獣人のパワーは強くて人間四人分ぐらいにはなと思うから。」

だから、多分戦ってどっちも死んだと思います……」

「……。それを、彼らは望んだのか？」

「——う、うん……」

「そうか……ありがとうつ、フォルテ、アリア」

思案に少し眉をひそめるままに俯いていた顔を上げると、ユウは再びぎこちなく、不安げに首をすぼめる二人に微笑んだ。

その笑顔に二人の表情もすぐに明るくなり、二人は力一杯頷くと踵を返してブリッジを飛び出していった。

そしてブリッジの入り口が閉まり、零れる深いため息。

両手に持っていた資料を隣に立っていたミアに渡すと、ユウは踵を返すままに、渋い表情のジークを見上げた。

ジークは少し呆れた様子で肩をすくめるままに、銀の狼を見下ろす。

「まったく、二人とも——見苦しい所を見せてしまいましたな……」

……」

「艦の管理だけでなく、艦の子供達の後方支援もしてくれている。

お前にこれ以上望むべくもない。

ありがとうジーク……」

「隊長は優しいお方だ。だがあまり優しいと、クルーが委縮してしまふ。少しハメを外してもらわれないかがかかど？」

そう言っ細め目を開いてはジークは隣に立つ栗毛の少女を睨みつける。

少女は報告書を覗きこみながらその視線にハツとなって直ぐさまにユウの後ろに隠れジークを見上げた。

「な、なにさ……」

「——うちのガングレドは信用なりませんか？」

「ぼ、ぼくだってユウの役に立ってるよっ」

「女は家を守っていればいい。……特にこんな世界が困窮してる時はな」

「僕はユウのお嫁さんじゃないのっ」

「——ほお」

「……な、なんだよその目は」

ジイと見下ろすその細い目に、ミアはムスツと頬を膨らませながら不満げに唇を尖らせる。

と、ソツと栗色の髪を梳く毛むくじらの手。

長い尻尾が僅かに左右に揺れ、ユウは宥めるように少女の頭を撫でると、ジークを見上げては困ったように笑みを滲ませた。

「ガングレドは信頼している——だからこそ、彼とは離れている。あいつには俺と同じ場所に立ってほしいんだ」

「……隊長のように、組織は支えられませんよ、あのバカはそれほど強くない」

「できるさ——信頼しているから、アイツは傍にはいない。……戦いもそろそろ局面を迎える。」

三年越しの決意を实らせないといけないんだ」

「……」

「そのためにもミアにも傍にいてほしい。何かあった時彼女の力が必ず必要になる。」

そしてジーク、お前にも、そしてこの艦にも遠からず大きく動いてもらう事になるだろう」

「そうですか……」

「その為に、今回少し顔を出したくてな——後あなたの決意を聞きたかった」

じっと見つめる紅い瞳。

ジークは多少驚いたような表情をするものの、ややあってブリッ

ジに配置されたメンバーをへと振り返った。

そしてその大きな背中をユウに向けたまま、彼は腰の後ろに手をつく。

いつもと同じ、彼が艦長であるときに取るポーズと同じ後ろ姿だった。

「……あなたがやろうとしている事、私は大凡想像ができます」

「俺に迎合したくないのなら、最後の作戦前に『エルドラド』を切り離し部隊を分けるつもりだ」

「……一つ聞きたい」

「ああ」

「——ユウ……あなたの未来は人類全てを幸せにしますか？」

「少なくとも、相手を制圧し、或いは自らが服従する、そんな結末を選ぶつもりはない」

「和平ですか」

「——例え、契りを結び一時的な平和を得ても、再び争いの火種は起きるだろう」

「新たな道——その道を、あなたは照らすと言う……」

「ジーク。……俺は皆を導きたい。その為に都庁へと向かわなければならぬ。そして道を啓く。我々が戦う事必要の無い、場所へと」

「おもしろい……」

——ニイと綻ぶ口元。

グツと後ろに組んだ両手を力を込めきつく絡ませながら、その大きな背中を反らしジークは少し顎を上げて天井を見上げた。

「共に行きましょう。あなたの信じる未来を、ガングレド同様に、信じましょう」

「ジーク……ありがとう」

「ただし、私の命令は少々荒っぽくなりますがな」

「——艦の守備隊の方をお前に任せたい。できるか？」

「細かい事は後で。……しかし、貴方の頼みとあれば、このジーク、命を賭けて、隊を守りましょう」

「ありがとう……それが聞きたかった」

「相変わらず心配性だ」

「皆の命、お前に預ける」

「元より」

翻す長い尻尾。

地面を蹴り、悠然と歩きだす銀の狼の背中中は大きく、ジークは背中を向けながら彼の気配を強く感じていた。

——暗闇の中、草原を歩く強い足音。

闇はどこまでも続き、夜風に銀の体毛を靡かせ、星空を見上げ、地平線を見つめ立ちつくす。

ゆつくりと赤く滲み始める地平線。

風に揺れる草の穂がその色を緑に染めていき、昇る茜色の大波を厚い雲が受けて白く色を変え、夜に沈んだ銀の体毛が光を放つ。

スウと細める紅く煌めく瞳。

覗かせる牙は鋭く雄々しく、銀の狼が夜明けを見上げて、身体を反らし吠える。

力強く、夜明けへの道を知らせる——

「……共に行きましょう」

そう呟く声がフロアに響き、ジークはゆつくりと目を開くと、小さなため息と共に視線を落とした。

そこにはじつとこちらを見つめる無数の視線。

クルーの驚いたような眼に、ジークは苦い表情を浮かべては、たじろぐままに顔をしかめた。

「……なんだ」

「涙出てます艦長……」

「うわぁ……鬼が泣いてる……怖いわぁ……」

気がつけば、涙が突き出た鼻筋の根元を伝っていて、ジークはハッとなるままに目元を何度もぬぐった。

しかし濡れた体毛は中々乾かず、ジークは顔を押さえながらクスクスと笑うクルーに叫んだ。

「お前ら！ちゃんと艦の制御せんかい！ シゲ！お前また索敵報告忘れてるぞ、提示とつくに過ぎているではないか！」

「な、何で急に怒るんですか！？」

「いつも以上にキビキビ行くぞ、隊長に艦を任せられている以上死ぬ気でここを守るのだからな！」

『は、はい！』

戸惑いながら力強い返事がブリッジの中に響き渡った。

十三話目

「ではブリーフィングに入る。隊長こちらへ」

いつもこれは慣れなかった。

「あー……では、これからシブヤ地下軍事施設破壊、及び第二次ヨコハマ送電施設破壊作戦の説明に映る」

ただこれはまず自分の言葉で伝えないといけない、彼らが問いた
だすであろう問いかけに自分で答えないといけない。

死ぬかもしれない戦場に送り出す彼らに、誰が責任者であるか、
誰が送りだしたのかを知らしめないといけない。

彼らは死ぬ予定なんてなかった。

こんな世界でなければ、こんな異変が起きなければ、戦いに赴く
事なんてなかったのかもしれない。

そんな彼らを、俺は弾丸の近い場所へと送り出す。

「今作戦は、時間差による所謂二面作戦を敢行する。その為にほぼ
こちらの半分の戦力を攻撃に回す事になる。

攻撃には今より40時間後に太平洋沖二十キロ地点よりアストラ
イアからエルドラド発進、その後一時間後の2012時にヨコハマ
送電施設を海側から襲撃。

続いて、シブヤ地下軍事施設においては、二時間後の2109時
に東京湾に着岸。その後台場より地下道を伝って地下施設を襲撃す
る。

ルートはGルートを使用したい。侵入ルートが地下道からのみと
限られている事とかなりの長い距離を行軍することを想定して、正
直なところ後方支援は用意できない。こちらは短期決戦で落とす」

——喋りながら、息がつまりそうだった。

真剣に俺の話を聞いてくれる出撃メンバーは皆、少し表情を曇らせていて、それでも必死な様相で俺の言葉を頭とメモにたたきこむ中にはまだ子供もいる。もちろん守備隊に回すつもりだが、人員が少なければ或いはガングレド隊に回す予定である。

彼らの死ぬ未来が、暗室の中、光るモニターを背に喋りながら、
瞼の裏で明滅する。

——死なせない。

絶対に皆で、ここを切りぬける。

「……隊長？」

「——必ず、お前達を生きてここに戻してやる。絶対だ」

「……」

「説明を続ける——シブヤ制圧部隊には俺が、ヨコハマ破壊部隊にはガングレド・ハイエクが部隊長として入る。

残りはアストライア守備隊としてジークマイヤー・ヴィトゲンシュタインが艦長兼任で入り、エルドラド守備隊としてミア・ミルドレシア作戦参謀官が入る。

それぞれ皆には役割があてがわれている。手元の資料に記載されているが、今一度点呼していこうと思う」

俺は俺の部隊の仲間を、ガングレドはガングレドの部隊の仲間を呼んでいく。

皆、表情は不安であるもの、牽引する人間が付けばそれだけで僅かにだが明るくなるのがわかる。

——俺も不安だ。

精々二十代後半の人間が、人の死を断することができるだろうか。仲間の命を預かることができるだろうか。

（……迷うな）

迷えば人を殺す。

あの日爆風の中に死んでいった仲間達、多くの同胞の血を無駄にしないために、戦いを終わらせないといけない。

和平ではなく服従ではなく征服ではなく——我々のあるべき地へ。

行こう。

彼らを導くために、再び力を貸してくれ。

紅き瞳のオルフェト『ゼノアトラ』よ……。

エルドラド出港四時間前。

「……艦長」

戦艦エルドラドの一室。

ヒクリと痙攣する尖った耳。

扉を叩く音と共に聞こえてくる低く重たい声に、出港準備を進めていたユウは鼻先ヲヒクつかせ振り返った。

そこには扉の向こうに感じるいつもの匂い。

ガングレドが目の前に立っている——ユウは首を傾げながらも、扉を開き眼前に立つ彼に微笑みかけた。

「ガングレド。どうしたんだ？まだ出港準備は早いぞ」

「隊長こそ——こんなに早くどうされたのかと思ひまして」

「少し目が覚めてな。見送りには参加するよ、心配するな」

「ん……申し訳ありません」

気まずそうに首をすぼめる黒い狼に、ユウは可笑しそうに肩を震わせると、彼の肩を叩き手招きをした。

「気にするな。入ってくれ」

「了解しました」

「畏まるなよ、大したことじゃない、友人として少し話でもしたい
と思つてな」

「——」

と入りかけた脚が止まる。

怪訝に思い振り返れば、そこにはカチコチに身体の固まった黒い狼のガングレドがいて、ユウは眉をひそめて彼の顔を覗きこんだ。

「ん、どうした？」

「い、いえ…… 光栄です」

「おかしなガングレドだ。とにかく入れよ」

「は、はい……」

心なしか息が荒く、緊張気味に目が血走っていて、ユウはベッドの縁に座りながら複雑な笑みを浮かべた。

ガングレドはというと、壁にもたれかかって緊張気味に腕を組んで頂垂れるだけで、ユウは躊躇いがちに彼に手招きをする。

キュツと丸くなる黒い尻尾。

戸惑いがちに、彼は無言のまま、銀の狼の隣に座ると、九十度に曲がった膝の上に拳を置いて固まってしまふ。

「……」

「……俺といるのは辛いかな？」

ペタンと垂れる尖った耳。

ユウはそんな緊張気味のガングレドの横顔を覗き込んで、申し訳なさそうに笑みを滲ませた。

と、ガングレドはその強張った顔をハツとさせるままに覗きこむ彼に何度も首を振る。

「ととととんでもありませんッ」

「なんだ、それならよかった」

「た、ただ…… 私なんぞぶつきらばうな人間を友人扱いなど…… 今まで厳しい対応をしてきたもので……」

私は、その——嫌われていると」

「ふふっジーク共々、もう五年だぞ？」

「……？」

不思議そうに首を傾げるガングレドに、ユウはベッドから足を投げ出したままシートに体を横たえた。

そして腕を頭の後ろに添え天井をみあげながら、懐かしむように

紅く澄んだ瞳を細める。

「そうだな……ずっとお前と一緒に五年間戦い続けた」

「隊長……」

「お前は俺の傍にいたんだ。好意を持たんわけがないっ。お前は俺の友達だ」

「……光栄です、私は……本当に」

「俺もだよ。ありがとう」

口の端に零れる優しい笑み。

そう囁きながら、ユウは項垂れて身体を強張らせるガングレドを横目に、ゆつくりと目を閉じる。

息を吸い込み、眠るように胸を上下させながら隣でこちらを見下ろす黒い狼に囁く。

「なあ……ガングレド……」

「はい……」

「一緒にいてくれて、ありがとう……お前のおかげでここまで来れた」

「——貴方は、ここで終わりません」

スウと青い瞳を細め、ガングレドはそう言って、ユウと同じようにベッドに上体を横たえると天井を見上げた。

そして目を閉じる銀の狼の横顔を横目に見つめながら、静かに囁く。

「我々と共に、未来にいくのです。争いの無い場所へ、一緒に」

「……お前はついてきてくれるか？」

「無論です」

「何から何まで……申し訳ない」

「終わりみたいなことを言わないでください……私はあなたが守ります」

「ありがとう……」

「私だけではない、ジークもクルーもアストライアにいる全ての獣人が貴方を慕い、貴方を守るでしょう。」

貴方は、我々の誇りです……」

「ミアが入っていないようだか？」

方を震わせ笑う銀の狼に、ガングレドはムツと目を細め口を尖らせると、不満げに鼻息を漏らす。

「アレは少し軽薄すぎる。人間であるし、何より子供だ。隊長にはそぐわないと、私は思います」

「あれでも立派な兵器開発及び作戦部長だぞ？」

「隊長にお似合いの女性は多くいますっ」

「手厳しい——まるで父親と話しているようだ……」

「——も、申し訳ありません……」

「いいさ。聞いていてお前の言葉は心地いい……包まれているように心が休まる」

「隊長……」

「これが終わっても、またお前の声が聞きたい。……ずっと俺の傍で俺を支えてくれ。時々俺を叱ってくれたら嬉しい。

友として、副官として、何より仲間として」

肩を僅かに震わせ嬉しそうに笑う銀の狼に、ガングレドはもぞもぞと僅かに身体をよじる力強く頷いた。

「……何としても——必ず」

「頼んだぞ。かつて俺に預けたお前の命、今は返すが必ず俺の下に戻してもらうぞ」

「はい……！」

「——しみりさせたな。こんな俺ですまない」

「いえ……私は……そんな隊長が好きですから……」

声が部屋に響く。

銀の狼は紅く澄んだ瞳を僅かに開くままに、その肩を大きく震わせ静かに笑い声を響かせた。

「くくくっ……そうか、俺もだガングレド」

「——」

「んん……話してたら眠気がやってきた。見送りまでもう少しだけ

寝るよ……」

「は、はい……」

そう言つて、程なくして狼の口元から寝息が聞こえてくる。

ガングレドは体を起こすと、あどけない彼の寝顔を覗きこんでは、複雑な表情を毛むくじやらの顔に滲ませた。

「……隊長」

そして、そつと彼の頬に指を這わせては、サラリと銀の体毛が爪を撫でる。

——暖かい。

伝わる人肌の体温。

そして僅かに尖った耳に聞こえる、穏やかな心音。

ガングレドはゆっくりと眠るユウから手を離すままに、胸に手を当て彼の言葉を胸に刻みつけた。

（ユウ……私は必ず）

優しい寝息を立てる銀の狼、大切な友人を見下ろし、黒き狼はその表情を硬く強張らせた。

眠りながら、彼は僅かに微笑んでいた。

それだけで、体温が高くなった気がした——

十四話目

「ぎゃあああああ！」

校舎から響き渡る悲鳴。

居てもたつてもいられず飛び出せば、僕の教室の中には、異形の化け物が暴れ回っていた。

背中から迫り出す腕と思しき触手が四つ。

脚は何本も生えて、頭は縦に割れて中からまた首が二つ伸びてぶらぶらと垂れていた。胸元には剣が突き刺さった跡のようにぽっかりと穴が空いている。

体は何倍にも歪に膨れていて——そこには化け物が教室の中で机や椅子を潰し砕きながら身体をよじっていた。

僅かに身体にこびり付いた制服の一部が、こいつを『元人間』だと辛うじてわからせた。

「……な、なんで……」

「ぎゃあああ！」

触手が背中から突き出す生徒の身体。

ぶらりと串刺しになった四人のクラスメイトの身体が紅く滲んだ夕焼けの教室に漂い、程なくして血飛沫が天井を斑点状に紅く染める。

腹が裂けて、大きな口が胴体に露わになり、人の姿がゆっくりと飲み込まれていく。

ブチリッ

四肢を食いちぎるままに身体を飲み込むと、断面から筋肉の垂れた手足が床に転がる。

ビクンと手が痙攣して、僕の足を掴む。

それは、間違いなく、さっきまで生きていた人間の手だった。
血溜まりが僕の足元に広がる――

「はぁ……はぁ……」

――息が上がっていく。

汗が止まらない。

心臓が跳ねあがる程に、心が震える。

でも、それは恐怖ではない。

緊張でもない。

何か、胸の奥から怖いという気持ちすらも飲み込んで、大きな感情のうねりが内側から昇ってくる。

それは――郷愁。

――お前は俺と同じだ。

そう呟くように、入り口に立ちつくしたまま、息を上げる僕を、
化け物が三つの頭をこちらに向ける。

又チャリ……

床に張り付く肉を引きずり、化け物がこちらに歩み寄ってくる。

こちらを見つめる。

違う……

違う――

「……逃げる、皆!」

脚が震える。

僕は教室の入り口に立ちつくしたまま、こちらに釘づけになる化け物を横目に炭に隠れるクラスメイトに叫んだ。

皆は怯えながらも、おずおずと別の入り口から教室を出ていく。

そして教室には僕と化け物だけになる――

「……!」

スウと伸びてくる鋭い触手。

パンと破裂するガラス。

風を切った刃は辛うじて身体をよじる僕の身体を掠めて、廊下の

窓に突き刺さり、空へと投げ出された。

血が制服に滲み、痛みに傷口を押さえながら、僕はようやく動き出す身体を引きずり踵を返す。

そして廊下へと再び飛び出て、逃げたクラスメイトを追いかける

——ぎゃあああああ！

方々から聞こえる生徒の悲鳴。

これは逃げた四人だけのものだけじゃない。

どうという原理かは分からない——校舎に残った生徒の中に、あの化け物が混じり始めている。

(……くそっ)

——生きている皆を集めて逃げないと。

幸い、後ろを振り返ってはあの化け物の動きはとても遅く、触手もここまで届かない。

あの個体全てがあの特徴なら、皆逃げられる。

僕は腕を引きずりながら、顔を強張らせ息を切らせつつ、悲鳴の聞こえる方向を脚を進めた。

そして一学年下の教室に向かう。

だがそこには既に異様な化け物だけが十体ひしめくように残り、床は人の頭と血まみれの床が残るだけだった。

その肉片すらも、血溜まりすらも、化け物は首を伸ばしてすすりあげる。

無数の紅い目が、廊下に立つ僕をこちらを見つめる。

紅い目が、僕を見つめる

——ドクン……！

「グッ……」

心臓が跳ねあがる。

奴らの視線が突き刺さるたび、全身に一瞬悦楽の様なものが走り、背中に悪寒が絶え間なく走り、汗がブワツと噴き上がった。

怖いんじゃない、嫌悪でもない、憎悪でもない。

僕は、彼らを求めている――

「……くそっ！」

ジリツと身体を前のめりに近づいてくる、不揃いの化け物。ざわざわとさざめく身体の奥の何かに顔をしかめながら、僕は踵を返すままに生存者を捜して校舎を走った。

心なしか、耳が良くなり、遠くから聞こえてくる人の足音。

悲鳴と泣き声と共に走るいくつもの気配をたどり、僕は廊下を走りながら学校の体育館へと走り込む。

そして扉を開け、力一杯閉めると共に中を覗く――

「……え？」

――阿鼻叫喚だった。

そこには避難場所の学校の体育館のはずだった。

床に広がる紅い血の海。

食い破られて床に突っ伏す人影を踏みつけ、或いは引きちぎりながら、そこには無数の化け物がひしめき合っていた。

触手で壁に寄り添う生徒の群れを突き刺し、大きなあざとで逃げ惑う人の首の肉を食いちぎり、引き裂いた腹から内臓を取り出す。

血のすすする音と悲鳴がいくつもこの広大な空間に響き渡る。

それでも血溜まりは絶えず広がっていく。

人が絶え間なく死んでいく――

「……」

「た、助けて……」

「！大丈夫か！？」

足元を見下ろせば、そこには足首を食いちぎられたものの身体を床に這わせ近づく生徒が見え、僕は駆けようとした。

そして手を伸ばし、彼女の手を取ろうとした。

――背筋が凍った。

「助けて……助けて……私……皆と同じになる……私が死んじゃう」
皮膚が破け、全身から顔を出す肉腫。

その姿はまるで水を流し込まれて膨れ上がる風船。

刹那、突き出す茨の様な黒い触手が体中に浮き上がる黒い瘤を破って突き出し、這い寄る少女の身体を捉えた。

少女の首の皮膚が裂け、？げ——そして七つの目を持った別の首が三つ姿を荒らす。

背中からは触手と共に虫の羽が生え、腕が千切れると共に八つの前足が地面に突き刺さり僕の前に聳え立った。

そこには触手を虚空に漂わせ、巨大な蠅のような化け物が佇んでいた。

二十近い目をこちらに向け、涙を流していた——

——寂しい。

そう訴えかけているようで、僕は後ずさりながら飛び込んでくる触手の刃から身体をよじり後ずさった。

そのまま背中を向け走り出そうとしながら、不意に化け物の奥、血だまりの中転がる人の腕が見えた。

その腕からも触手が伸び、別の生き物のソレへと変貌しつつあった。

後でわかったことだった。

その『変異』はまったく人の意思、そして機能に関わらず全ての物質に働きかけるものだった。

ミアから聞いたことだが、それは変異ではなく『適応』であると——

「くそつ、くそつ……！」

僕は何もできず、ただグラウンドに飛び出し、生存者がいないかと、脚を動かし目を動した。

耳から遠のいていく悲鳴。

校舎を見上げれば既に『人』の影はなく、歪に変異した化け物が無数に闊歩していた。

流れた血は少なく、校庭には逃げ惑っていた人の『なれの果て』が、わらわらと列をなして正門を出て町へと出て行っていた。

あの、紅い光の柱が夕焼け空を貫く、大きなビル、都庁ビルへと

「……美沙ちゃん……拓斗」

立ち尽くしながら、不意に彼らの事が頭をよぎる。

もしかしたら、彼らは既に変異してしまったのかもしれない。

それでも僕は、淡い期待を抱きつつ這い寄ってくる化け物の縦列を横切り校舎の中へと再び戻った。

静まり返る夕焼けの校舎。

もはや人がいる様子はなく、廊下を走りながら、見えるのはこちらを窓から覗く無数の化け物。

もはや、人の影すらどこにもない――

「ぐう……！」

床に広がる血だまりに足を取られ膝をつくままに、身体が紅く冷たい床に滑りながら横たわる。

痛い。

苦しい。

膝が僅かに悲鳴を上げ、目に入った鮮血が視界を滲ませる。

心臓がドクドクと異様なくらいに高鳴り、耳が周囲の気配を捉え、血と肉片の匂いを鼻先が掠める。

べちゃべちゃと肉を食う音が耳に入る。

ズルズルと何かが歩く音が遠くからでも届き、頭の中に響く。

悲鳴が残響となって廊下に走り、鼓膜をつんざく。

鼻が利かなくなるくらいに血の匂いが辺りに広がり、床に突っ伏しながら意識がもうろうとしてくる。

どうしようもなく、人が死んでいく。

化け物に変わっていく――

（くそっ……くそっ！）

――負けたくない……！

ポタリポタリ……

身体が滴り落ちる鮮血。

血が全身に染み、身体を重くなり、それでも血だまりに広がる肉片を握りしめ、僕は立ち上がるままに身体を引きずり歩く。

目は既に霞んで見えず、やけに利く耳と鼻を頼りに人の気配を探る。

目を閉じながら闇の中に彼女の気配を探す――

（美沙ちゃん……美沙ちゃん……！）

――カツリ……

靴が床を叩く音。

東の方、二百メートル先から僅かにだけ聞こえる。
行こう。

僕は目を僅かに開くままに、血の匂い広がる廊下から離れ、校舎を離れ学校の裏山へと足を運んだ。

そこは木々がうつそうとしていて、フェンスが麓を囲んで生徒が入ることができない場所だった。

できないはずだった――

（あった……）

――そこは、こっそりと拓斗と見つけていた

人気の無い校舎裏、フェンスが眼前を覆う中、足元には金網がペ
ンチで破られた場所があった。

前に、拓斗と一緒に通った穴があった。

そこには、上靴が二つあった。

彼女の匂いがした、そして拓斗の匂いもした。

二人は裏山にいる。

「はあ……はあ……」

体は重たく、痺れるように頭は動かず、脚は楔で縛られているかの如く。

それでも、僕は彼女に会いたい。

あつて安全を確かめないと――

「……美沙ちゃん」

木々をかき分け、山の斜面を登り、薄暗い闇へと身体を鎮め、僕

は彼女の匂いを追いかける。

シュツと頬を掠める木々の枝葉。

切り傷がいくつも浮かび、血痕を土に浮かべ暗闇の奥、その奥へと僕は手を伸ばす。

やがて木々の合間の向こう、紅い夕焼け色が滲んでくる。

ソレと共に彼女匂いが近づいてくる。

（美沙ちゃん……美沙ちゃん！）

僕は手を伸ばす――

「美沙……！」

――夕焼けに地面に映る黒く滲んだ影。

フラリ……

さざめく風の中、夕焼け色に染まった木々の枝葉が揺れ、ソレと共に宙に浮いた彼女の足が揺れる。

ギシリ、ギシリと縄が太い枝に絡まって彼女の首を引っ張り上げる。

ぐったりと垂れたほっそりとした首。

俯く小さな顔。

露わになった白い肌は、僕のように枝葉に撫でられ切り傷がいくつも浮かび、股の間からツうと血が垂れていた。

ハラリ……

長い黒髪が風に揺れて、夕焼け空に舞い上がる。

見上げるばかりに紅く、その空の下で、彼女は裸のまま首をつつていた。

胸にナイフが刺さっていた。

死んでいた――

「……ど……」

――ガサガサガサッ

遠くから聞こえてくる、走る人の足音。

見開く、血走った黒い目。

振り返れば、闇の奥から人影が僕めがけて、僕にナイフを突き出

彼女は、微笑んでいた。

「――美沙――」

目が開き、気がつけば立ち上がり、僕は彼から離れていた。記憶が断続的に続いている。

最後に彼を見た時、その右腕は宙を舞って、血飛沫すら上げず腕の断面を抱え逃げる彼の後姿だけだった。

僕は裏山に立ち尽くしていた。

首を吊った彼女の亡骸を背に、長い影を見下ろしていた。

その耳は頭から伸びてとても長く、その鼻は犬のように突き出て、長い尻尾が尻から出て身体は銀色の体毛に覆われた。

あの日。

俺の身体は、獣に変わった。

十五話目

海に広がる深い暗闇

甲板に響く重たい足音。

ヨコハマ湾。

遠くを山に囲われた沿海、エルドラドは発進デッキの上に数機のオルフェトを乗せ崩れた港へと接岸していた。

装備は皆重装備で、七十ミリ貫通徹甲弾装填電動回転式ガトリングキャノン、二百ミリ溜弾装填大型ガンランチャー、マルチプルミサイルランチャーなど、対エルザの装備が並んでいた。

そしてその中に巨大な筒とジェネレーターと思しき機械を装備した機体が三機、そして偵察用レドームを背部に装備した一機が集まってエルドラドから降りる。

その四機を横目に一機のオルフェトは暗闇に沈んだ巨大な施設を指差す。

『ゴルドチーム、見えるな』

『はい、ガングレドさん……』

四機はガングレドが駆るオルフェトに指差されるままに裸眼モニターをそちらに向ける。

海を背にそびえるそこは山に囲まれたドーム状の白い建物。周りは崩れかけた廃ビルに囲われ建物自体も未だに煙を上げた。

獣の目には、暗闇でもよく見える程に、ボロボロの施設が見えた。しかし、未だに稼働しているのか、施設周辺、及び廃ビルの中に敵機の気配がうつっていた。

『……多いな』

『だけどシールドエフェクトはないようです』

『ああ……隊長の予測通りだ』

五キロ先からでも聞こえるキャタピラ音を尖った耳に響かせながら、ガングレドはコックピット内で壁に埋まった手を動かした。

ガシャリ……

肩に担いだ高速回転式ガトリングレーザー二門を軽く回転させ、ガングレドのオルフェトは地面を蹴りあげた。

『ガングレド』

——ヒクリと尖る耳。

動き出したオルフェトを止め、ガングレドはマウントしたデイスブレイに映る銀の狼に目を見開いた。

『……隊長』

『いけそうか？』

『はい』

『——皆一緒に帰るぞ』

『はいっ……！』

『幸運を祈る。……エルドラドを発進させる。二時間後に会おうガングレド、皆』

『隊長も気をつけて』

モニターが途切れ、零れる小さなため息。

ソレと共に遠くでザブリと何かが海に沈んでいく音が聞こえてくる。

仲間が海に潜ったのを聞いて、ガングレドは再び表情を強張らせると、オルフェトを動かし闇の中静かに機体を沈ませた。

『全機ステルスエフェクト起動する。ゴールドチーム、アルファチームは山上へ行け。挟撃を行う』
『了解』

潜ませた声が響くと共に、ぞろぞろと沿岸部に続いていたオルフェトの姿がスウと宵闇に溶けて行った。

ガシャリ……

アスファルトの沈む音が僅かに響き、辺りに散らばる『異人』の

群れが六メートル強の巨人の足に潰れる。

グシャリと肉の飛び散る音が僅かに風に乗り、さざ波が生々しい音を攫って行く。

やがて沿岸部の港から、崩れた廃ビル、そして音沙汰の無いいくつもの家が立ち並ぶゴーストタウンへと近づいていく。

ソレと共に、暗闇に堕ちた街中を巡回する白いエルザの姿が家と家の間から顔を出すのが、モニターに捉えられる。

やがて黒きオルフェトもその体を廃虚の連なりの中へと潜っていく。

『退路を確保せよ』

『現在山側イルートを形成中。ゴールド、アルファの支援部隊がルート構築を行っています』

『一分やる』

『了解』

暗闇に身体を溶かしながら、黒きオルフェトがグッと身体を前かがみに屈めては、両腕に持った長物が地面を擦る。

約十五機のパワードスーツが僅かに散開して民家の前に身体を鎮める。

闇の中に蒼い瞳を僅かに輝かせる――

――バチリッ

不意に闇の中弾けて走る紫電。

座るままに装備が道のわきを走る電線にあたったのか、光が一瞬灯って黒い装甲に纏う透明な膜が揺らいだ。

そして一瞬だけ暗闇の中に、黒きオルフェトの姿が露わになる――

――ガシャン……

近づいてくる重たい足音。

二機のエルザが千切れた電線のあたりを囲うように近づいてくるのが見える。

ニィと黒い狼の口元に笑みがこぼれる――

『——もういいか？』

『ゴルドチームから連絡、隊路確保しました。いつでも行けます』

『行くぞ！ステルスエフェクト解除、各員送電施設を狙え！』

立ち上がる十五機の黒きオルフェト。

ガングレドのオルフェトがグツと地面に足を踏み込むままに、開いた脚部装甲から突き出た杭が地面に刺さった。

そして周囲の空気が熱を持ち、廃虚の街の景色が一瞬たわんで波紋が広がる。

『パルスバスター起動ッ』

——夜空に向かって噴き上がる土煙。

辺り一帯の地面が僅かに沈むと共に噴き上がる衝撃波が一瞬で辺りの民家や建物を薙ぎ払い呑みこんだ。

足元を払う重たい衝撃に吹き飛ばされる二機のエルザ。

粉塵ごと喰らいながら衝撃波はまるで茶色い津波の如く街の景色を一瞬で腹落とし、巨大な浅いクレーターが立ち込める土煙の中に出て上がる。

グツと十五機のオルフェトが銃口を持ち上げるままに粉塵の向こうに白いドームを捉えてトリガーを引く。

『ゴルドチーム、チャージでき次第撃て！』

——噴き上がる弾丸の雨。

立ち込める土煙に無数の穴が空いて一瞬で払われ、暗闇に断続的な閃光を走らせ、弾丸が光の尾を引いた。

そして爆炎と爆風が瓦礫と共に巨大な窪んだドーム状の施設から立ち上る。

ガラガラと分厚く白い壁が崩れ落ちるままに、何層にも重ねられた施設内部が粉塵の中に露わになる。

装甲が剥がれた部分へと砲弾と弾丸が尾を引いて闇を引き裂いて撃ちこまれていく。

その度に送電施設から小さな爆発が起きて瓦礫が崩れる音が闇の中に響く——

——ユウうつうつうつ！

——声の中に混じる激しい憎悪。

ザワザワ……！

逆立つ黒い体毛。

僅かに遠く、空気に乗って聞こえてくる低い声にガングレドは大型八連バレルを下ろし、足元に投げ捨てた。

『副長！？』

『俺がやるっ！』

外れる背部バックパック。

肩部ガトリングレーザーを回頭させ、黒きオルフェトは声のした方向へと向き直る。

そして近づいてくる数機のエルザの気配に、機体を前かがみにして、足部から迫り出したキャタピラで地面を走る。

そして送電施設の方向、近付いてくる紅い装甲のエルザに蒼い瞳を細める——

『ユウうつうつうつ！殺してやるうつうつ！』

装甲は全体的に厚く何重にも施され、およそエルザの通常の三割増しの大きさの機体だった。

肩と足には大型ミサイルポットが装備を装備し、腕部には大型の実体シールドと片手で持てる大型ピストルが見える。

大凡、近接特化型の紅き瞳のオルフェト『ゼノアトラ』対策の機体に見える。

『……貴様が隊長を……！』

右腕部の装甲が展開し、迫り出す内蔵ブレード。

ドオンッ

勢いを殺さず地面が割れる程に深く踏み込むままに、カ一杯に振り下ろす右腕。

ジジジッと火花と悲鳴を上げる分厚いシールドは、後ずさるままにブレードを受け止りながら表面に、深い傷が刻まれる。

『貴様の妄想に私の隊長を付き合わせるなどお！』

『ぐあああああ！』

ドオオンッ

そして重たい衝撃と共に、勢いよくシールドにめり込む脚部。右腕を振り下ろすままに機体をよじり、回し蹴りを撃ちこむと、紅いエルザは大きく仰け反りながらピストルのトリガーを引き絞った。

『殺してやるううううう！』

ドスンッ

キャタピラで地面を回転するようによけながら、五連レーザーバレルを大きく穿つ大型対装甲弾。

右ガトリングレーザーが動かなくなり、それでも左のガトリングから閃光が機体を後退させながら真っ直ぐにエルザの肩部のミサイルサイロを撃ち抜いた。

真っ赤に赤熱する武装がやがて爆発手前まで膨れ上がる。

紅いエルザは四つん這いになりながら、右肩部ミサイルを解除すると爆発する武装から這い出した。

そして立ち上がるうと機体を動かしながら、こちらを睨む紅く滲んだアイサイト。

こちらを恨めしげに視線を送っては、今にも爆発しそうな憎悪がこちらに垂れ流れている。

止めなければいけない。

出なければ、計画に支障が出る。

なにより――

『隊長の目覚めが悪くなる――死んでもらう』

闇を引き裂く閃光。

損傷した左肩部ガトリングを外すままに、もう一門のガトリングのレーザーラインが後続のエルザを撃ち抜いた。

そしてキャタピラによる蛇行で敵の弾丸を避けるままに、ガングレドは残った紅いエルザへと飛び出した。

『……貴様は隊長にとって悪となる！』

『あの男は——あの男は美沙を殺したあ!』

『貴様はそれ以上に多くのものを隊長から奪って行った!』

『お前は俺からユウを奪ったああああああ!』

『手放した分際ではさくかあ!』

火花を散らすブレードとシールド。

せめぎ合いをする中、巨大な白いドーム状の施設を穿つように光の奔流が山の側から闇を引き裂いて噴出した。

——立ち上る土煙。

高エネルギーレーザー砲が走った跡が、紅く溶けると共に衝撃波が後から続いて山の木々を薙ぎ払い、家屋を吹き飛ばしていく。

そして真っ直ぐに施設の分厚い壁を撃ち抜こうと光の柱が伸びる

『副長! こいつメグロと違ってクソ固い!』

——融解を始める分厚い壁の前に、噴き上がる光の粒。

光の柱は山の側から飛び出すままに、ドーム状の施設の壁を融かし抉りながら進みながら、やがてその射線が細くなっていく。

やがて施設内部まで光が届きながら、その奔流は細まってき闇の中に掻き消える——

『いつの間に壁を厚くして——まだ撃てるか!』

『一応!』

『いい子だ……!』

機体を掠める誘導ミサイル。

すぐ背後で闇を抉る紅い爆発を背に、ガトリングで紅いエルザに狙いをつけながら、ガングレッドは機体を前に動かす。

そしてシールドを構える巨大なエルザにブレードを振り下ろす——

『全機、ゴールドチームが撃った部分をねえ! 打ち崩すぞ!』

『副長はっ!?』

『こいつをぶち殺す……!』

——金属を撫で、風を切る鋭い音。

スウと紅い右肩関節に浮かぶ斬痕。

すくいあげるように振り上げた内蔵ブレードを収めるままに、キヤタピラで後ずさつては、そこにはエルザから滑り落ちる右腕の断面があつた。

「貴様が……貴様がああ！」

『お前らがユウを取ったあ！俺の友達を取った、獣人が俺の大切なものを奪った！』

「返せええええええええええ！俺のユウを返せえええええ！」

「渡すものかあああ！」

闇の中、蒼い残光が尾を引いて走る黒い巨人。
速度を上げ、夜風を切り、内蔵したブレードを展開するままに黒いオルフェトが紅いエルザへと飛び込む。

十六話目

シブヤ地下軍事施設。

東京メトロに広がる長い地下道の中に作られた巨大な軍事施設。中は兵器開発及び、異人の研究をするための施設だった。そこは捕獲した異人を解剖し研究し、或いはパイロットとして運用するための施設であり、同時に日本連邦軍が運営する軍事工場施設でもあり現在も連邦軍の量産パウードスーツ、エルザが自動で生産され、それらは機械によって解剖され研究された異人が乗せられていた。

ほぼすべてが自動化で動く空間。この場所は数人の残してほぼ無人に等しく、ただ機械の塊に肉の塊を詰め込む作業だけが淡々と行われていた。

——響き渡るサイレン。

広大なドーム状のジオフロント内の天井が真っ赤に染まり、即座に方々に建てられた工場から煙が噴き上がった。

そして程なく上がる爆炎。

工場の壁を貫き噴き上がる紅い炎は衝撃波と共に壁を噴き飛ばし、舞い散る瓦礫を横切り黒い装甲が炎の中に紅く染まった。

噴き上がる大型溜弾。

バックファイアを後方に吹きだし、腰だめで打ち出した無反動砲弾が一直線に工場の壁を破り、屋根から爆発を噴き上がらせる。

次弾を大筒に装填しながら、回転を始める肩部ガトリング。

対装甲弾が毎秒二百発で六連バレルから飛び出しては、足もとに広がる異人の群れを血煙に変えていき、射線はそのまま周囲の建物を八チの巢に変え土煙が大きく天井へと舞い上がる。

『いつけええええ！』

『うつさいバカあ！はしゃぐな！』

ガシャンッ地面に突き刺さる脚部固定用アンカー。

大型多連装長距離榴弾砲を両腕に構え、放物線を描いて火の玉が遠くに広がる工場、或いは研究施設にめり込んだ。

——地面に走る地響き。

黒き巨人の頭ほどある空薬莢が宙を舞うままに、遠くから大きな炎が衝撃波と共に噴きあがり空中に波紋が走った。

ザザッとアンカーが地面を深くこすり、更に腕を動かすままに砲塔が少し上を向く。

そして炎の向こう、ひと際大きな施設を捉え、計七機のオルフェトがシブヤ中央研究施設へと弾丸の雨を浴びせかける。

ゴゴゴゴッ

爆炎と土煙を上げゆつくりと巨大な白いビルが崩れ落ちていく――

『やったあ！』

『——来る！』

『あ……大きい気配が昇ってくる！』

ドオオオンッ

地響きと共に倒れたビルの中から噴き上がる衝撃波。

立ち上るキノコ雲のような粉塵が一瞬で晴れ、やがて紅いサイレンランプが途切れ、深い暗闇がジオフロントに立ちこめる。

そして、暗闇の中立ち上がる上体。

約四十メートル、見上げるばかりにおよそオルフェトの七倍近い巨体を覗かせ巨大なロボットが顔を出した。

全身に取り付けられた機関砲、誘導ロケットシステム、レーザー砲台。

広げた両腕すらオルフェトより大きく、まるで人型戦艦といった様相——深い闇の中、大きな首をもたげ大型ビルほどの大きさのロボットがこちらを見下ろす。

クワツと白い目が暗闇の中光り、獣人を睨みつける――

『化け物がああああああ！』

『すごい憎悪……全身の毛が逆立っちゃうよ……』

『お前らさえないなかつたらああああ！』

ドオオオッ

一歩歩くたびに地響きと土煙が上がり、グツと前のめりに腕を伸ばすままに後ずさるオルフェトを捉えようとする。

迎撃の弾丸を浴びせつつ、キャタピラで後方に退避しながら、それ以上の速度で巨大な戦艦のようなロボットがにじり寄る。

爆炎と粉塵にまみれながら、大きな頭が口を開き牙をむいてオルフェトへと拳を振り上げる。

『ここは人間が住む世界だああ！死ねえええええ！』

『隊長！』

――天井から噴き上がる土煙。

『パルスバスター起動』

光一つ差さない闇の中、紅く尾を引く残光。

天井が破れ、瓦礫と粉塵が降り注ぐ中、土煙の尾を引いて一直線に飛び込んでくる黒い影。

音無く風を切る冷たく黒い鎧。

風を切る冷たい音が頭上から響き、四つん這いになっていた巨大ロボットは首を回して不意に上空を見上げる。

――モニターに映るのは、尾を引く紅い瞳。

刹那、闇に閃く一文字の光。

右腕から伸ばした刃が闇に閃き、振り下ろした刃は火花一つ上げず、巨人の装甲を撫でおろす。

ただ風が悲鳴が、闇の中に響く――

『遅れた、すまない……』

ドスンッ

鈍い音と共に地面に吸いつく足先。

内蔵ブレードが装甲に収納され、紅き瞳のオルフェトは長い銀髪

の後ろ立てを静かに靡かせ友軍機へと振り返った。

ズルリ……

巨人の身体に浮かぶ一文字の斬痕。

ブレードが引き裂いた痕をなぞるように、ゆっくりと滑らかな断面を巨人の首が滑り落ちていき、土煙が背後から立ち上る。

『隊長つ、後ろ！』

『……まだやるか』

翻す長い銀の後ろ髪。

スツと後ろを振り返れば、そこには首を失い、それでも八機のオルフェトに四つん這いでやってくる大型のロボットが見えた。

『人を殺す事で仲間の未来が築ける——その為ならこの命、安いものだ』

『殺して……殺してやる……！お前らがいなかったら！』

『その過去はすでにない。……だがその未来は或いは存在するかもしれない。だから俺は仲間と共に闘う』

スウと闇に細める鋭く紅い瞳。

風を切り、勢いよく内蔵ブレードを剥き出しにすると、紅き瞳のオルフェトは静かに首なしの巨人に向き合った。

グツと前かがみになる黒い後ろ姿。

地響きと噴き上がる土煙に長い銀髪を靡かせながら、ゆっくりと下ろした右腕にブレードが地面を叩く、

メキリと地面に鋭い爪がめり込みグツと躯体が傾く——

『未来を拓こう——グラマト・ゼノアトラ……』

——スウと闇に溶ける黒い装甲。

紅き残光すら引かず風の音すら鳴らさず、無音の闇へと紅き瞳のオルフェトが飛び込んでいく。

ただ彼が立っていた場所に、走り出したであろう爪の痕と土煙が残る。

文字通り闇に消える——

『うわぁ……』

『すごい……隊長の本気?』

『……その五分の一ぐらいかな?』

——闇に走る無数の閃。

闇を文字通り風の如き速さで走る何か。

風が通った痕には、まるで巨大な金網の如く、一瞬でブレードが
割り貫いた痕がいくつも浮かび、ソレは全身に広がっていく。

音もなく、ただ斬撃だけが静かに火花一つ上げず広がり、崩れ落
ちるロボットの身体に滑らかな断面が露わになる。

そして崩れる四肢すらも霧と煙に変え、闇が無音の中へと飲み込
む。

そして無数に広がる斬痕は、そのままコックピットごと胴体を微
塵に切り裂いていく。

『があああああ! 化け物が、人殺しがああああ! お前らさえええ
ええ!』

キイインッ

闇の中に響く激しい風切音。

フワリと僅かに宙を漂う光の粒子。

地面を擦り滑るようにランディングしながら、振り下ろした右腕
のブレードが地面を大きく抉る。

闇の中に再び、背中を向け片膝と片腕をつきながら紅き瞳のオル
フェトが姿を現す。

文字通りバラバラになって宙を漂う無数の巨体の残骸を背に、ゆ
っくりと屈めていた機体を起こし、立ち上がる。

背中を向け、僅かにうつむいたまま、紅い瞳を足元に向け細める

『……また一步、終わることができる、これで』

開いた腕の装甲に収まる大型の内蔵ブレード。

フワリと土煙に漂う長い銀髪の後立。

紅い瞳を細め後ろを振り返れば、崩れ落ちて地面にぶつかる巨人
の残骸。そしてソレと共に大きな爆発が噴き上がりドーム状の施設

を紅く照らした。

爆風は地面を擦りアスファルトを巻き上げ、周囲の工場を一瞬で押しつぶしながら服上がつていく。

スツと腕を伸ばし、紅き瞳のオルフェトは手の平を開くままに光の粒子を手の中に浮かべる。

眼前に迫る紅い炎の渦に向き合う――

『エルクシュ――アルト・ラナフェル』

手の平から零れる光の粒子はやがて分厚い光のドームとなって、周囲のオルフェトを包み込み、爆風を跳ね返していく。

そして光の壁の向こう透き通って見える爆炎の川を見上げながら、近付いてくる友軍機に紅き瞳のオルフェトは振り返る。

『隊長つ、やったよお！』

『そうだな――残存している目標物の確認を』

『全工場破壊しましたっ大丈夫ですっ』

『まあ残っていてもいいが。……後でまた壊しに来るだけだな』

『隊長残酷う……』

『優しいつもりさ――ガングレドと連絡取れるか？』

やがて光の向こうから晴れていく爆炎。

光の壁が小さくなつていき、手のひらに小さな球体収まるままに、紅き瞳のオルフェトは手の平を閉じると腕を下ろした。

そして銀の狼は仲間の通信に耳を傾ける。

『――え……？』

そして目を見開く――

『――冷却まだ？』

「んん……まだ」

山の山頂付近。

海に面した巨大な送電施設が見下ろせる場所にて、四機の黒いオルフェトが片膝について構えていた。

手元には十メートル超の大型砲台。

冷却用ファンは常に回りっぱなしで蒸気を噴き上げ、銃身からは景色が歪む程に熱が昇っていた。

見上げればまだ撃てる状態ではなく——砲台を抱え構えたままのオルフェトから降りた獣人の少女は焦りに顔を歪めた。

「……どうしよう」

『待つしかない。ここで動いてどうなるものじゃない』

四番機のオルフェトは三機のオルフェトの背後、両腕にライフルを抱え山道で敵の気配を探りつつ背部に装備したレドームを空に向けていた。

『……皆うまくやる。やるって隊長は言ってた』

「……ユウ隊長」

『まだ？』

「——後一分」

『皆に伝えるよ』

「了解。私たちもそろそろ乗ろう」

三人の獣人は眼下に見下ろす夜の戦場の景色に後ろ髪を引かれながらそれぞれオルフェトへと戻る。

ドオオオオンッ

爆発と粉塵が海に面した街に広がり、ガラガラと白いドーム状の建物が崩れていく。

ソレと共にマズルフラッシュが断続的に各所で光を放ち、宵闇の中、クレーター状に広がった戦場の中で味方が散開していく。

そして立ち上る粉塵に混じって、弾幕と砲撃が巨大な送電施設の壁を崩していく。

『ぐえ！』

『七番機！後退しろ！六番機！後退しつつ五番機とバディを組め！』

『り、了解……！』

ドゥンッ

耳元を掠めるミサイルのバックファイア。

ガングレドのオルフェトは体を屈めキャタピラで地面を滑るように身体をよじるままに右腕のブレードを振り上げた。

シュツと縦に真つ二つに裂ける小型ミサイル。

推進機と弾頭が分かれ後ろに爆発することなくミサイルの断片が転がり、オルフェトは機体を屈めるままに紅いエルザへと飛び込んだ。

グツと掲げる大型のシールド。

すでに右半分を切り裂いて僅かに紅い装甲が露出し、オルフェトはその肩を突進するままにぶつけ紅いエルザを地面へと押し込んだ。

『鈍い！』

『があああ！』

シュツと小さな音と共に関節にめり込む鋭く、同時に分厚い刃。

仰向けになる紅いエルザを組み敷くままに、オルフェトはその首元にブレードを突き刺すとそのまま首を刎ねた。

『ユウウウウウウ！』

『黙れええ！』

ポンッと宙に舞う頭部センサー。

ドドドッ

ミサイルが脚部から発射される中、ガングレドのオルフェトは前方に飛び上がった。

そして身体をよじり頭を下に逆さになる中、肩のガトリングレーザーがとっさにかざした分厚いシールドに跳ね返される。

『後方機、現在の目標の損傷率を教える！』

『現在目標地点予想破壊率七十五%、もう少しです！』

『上等だ、各機異人如きにぬかるなよ！』

ズウウンッ

地面に地面にめり込む脚部。

足元から噴き上がる土煙を払うように踵を返すと、八連レーザーバレルを回転させ後方に下がりながらガングレドはトリガーを引いた。

闇の中レーザーラインが連続して立ち上がる紅いエルザの両脚部を貫き、赤熱した弾痕が爆発に変わる。

『ああああ！貴様ああああ！』

八連レーザーバレルから噴き上がる煙。

そして紅いエルザはゆっくりと前のめりに倒れていく中、ガングレドは肩部装備を外し紅いエルザに背中を向けた。

グツと地面の砂を掴みにじり寄る紅いエルザ。

粘りつくような憎悪にゾクリと体毛が逆立ち、ガングレドは剣の巻に顔をしかめながらモニター越しに紅いエルザを睨む。

『……隊長は、我々のものだ』

『返せ……返せええええ！』

『人は我々を嫌悪した。故に我々の敵である——貴様らが獣人に行った事、隊長に与えた苦しみ、決して忘れん。

貴様は人で我々は獣人だ！』

『ユウ……ユウうつうつうつ！』

『殺しはしない——隊長が悲しむからな』

腰の装甲が開き迫り出す小型の拳銃。

通信越しに吠える男の嘆きを横目にオルフェトは拳銃を左手に右手に内蔵ブレードを取り出すと、キャタピラで送電施設へと足を運ぼうとする。

土煙を上げ、走り出そうとする——

——掠める機関砲の発射音。

ブシュッ

尖った耳に聞こえてくる肉のちぎれる音。

コックピットの右壁が大きく挟れては、ガングレドは痛みに身体をよじるままに、左腕でオルフェトを操作する。

挟れた装甲から覗かせる狭いコックピット。

腹上部装甲が背後から迫る弾丸に飛び、オルフェトは右腕を垂らしながら慌ててターンをして左腕の拳銃で応戦する。

『ぐうううう……！』

ジクジクと痛みが頭に走り、既に右腕の感覚は全くなかった。

右腕が吹き飛んだのを感じる――

霞む視界でモニターを確認すれば、そこには這いつくばりながら右腕の内臓機関砲をこちらに向ける紅いエルザがあった。

紅く滲んだアイサイトがこちらを見上げ、無秩序に弾丸を飛ばしてくる。

嗤っている――

『殺す…… お前殺してユウを取り返すんだああああ！』

『戯言を……』

血が抜けてきて、頭の熱っぽさと共に息が荒くなり、フラフラと身体を操作しながらトリガーを引き絞る。

ソレと共に拳銃の弾丸が二発、紅いエルザの頭と背部を撃ち貫き、ソレと共に紅いエルザが機関砲を飛ばす。

ドドドドッ

眼前で鈍く響く弾丸の音。

やがて黒い装甲の一部が破れ、重たい衝撃が腹にあたると共に突き刺さるような痛みが身体を走った。

『かあ……』

モニターと壁に飛び散る血飛沫。

口から血が上り、背中まで貫く分厚い装甲の破片に顔を歪めながら、ガングレドは目を血走らせモニターを覗く。

そこには頭部と背部から炎を上げる紅いエルザ。

特殊発火弾――金属の摩擦により高熱と発火現象を起こす弾丸が紅いエルザを一機に燃やし、やがて大きな爆発が起きる。

そして紅いエルザから零れた激しい憎悪と邪気が途切れる。

『……これで、隊長は……』

口の端に血を滲ませ、安堵に零れる笑み。

痛みはすでになく腹から溢れた血が身体を濡らす中、左腕のみでガングレドはオルフェトを操作して鮮血のこびりつくヘッドマウン
トモニターに目を細める。

土煙を上げるキャタピラ。

挟れた装甲の隙間から火花を散らしながら、ダラリと右腕を垂らしつつオルフェトは巨大なドーム状の施設へと走る。

ドロドロと血があふれては剥がれた装甲の隙間から紅い尾を引いて、黒い鎧を濡らす。

土煙を上げる音が尖った耳から遠のいていく。

目がかすみ、やがて暗闇が視界の端から広がり始める。

もう、持たないだろう――

『――こんなものか。死とは……』

ニイと零れる笑み。

ドーム状の白い壁がやがて眼前に見え、オルフェトは壁に沿うように走行する。

ソレと共に弾幕が降り注いで粉塵舞う壁の挟れた部分が見えてきて、オルフェトは前かがみに粉塵の中へと機体を潜り込ませた。

そして施設内へと入っていく――

『ふ、副長！？』

『各機へ！私が内部から施設を破壊する、完全に、確実に！』

『だ、だけど！』

『ゴルドチーム、私が施設中枢に付いたら信号を出す、その反応を撃て！』

機体を前かがみに走らせながら、ダラリと垂れた右腕が地面に擦れ、やがて肩関節から折れて外れる。

紅く赤灯の並ぶ天井へと消えていく右腕。

ソレと共に弾丸の雨から前方から降り注ぎ、通路を走りながら警備ロボットが近づいてくるのが見える。

だがそれも視界が黒くかすむと共に消えていく。

（隊長……申し訳ありません……本当に……）

それでも、耳と鼻越しに感じる敵の激しい敵意と弾丸の飛んでくる距離と速度。

滑らかな黒い装甲で弾丸を弾くようにして、機体を動かしながら、オルフェトは走るままに施設奥へと走っていく。

（私が死ねばあなたは悲しむでしょう……あなたが泣く所が眼に見えるようです）

困ったように、黒き狼は口の端を歪めうつすらと笑みを滲ませ、そして目を静かに閉じた。

なにも映さなくなった瞳の奥、景色が見えた。

——ガングレド、大丈夫か？

暗闇の中、自分を呼ぶ声がした。

（……隊長……隊長）

手を引く銀色の狼が見える。

夜風に揺れる長い尻尾。

草原に立ち、星空の下、地平線から昇る夜明けを見つめる、気高く雄々しい紅い瞳のオオカミが見える。

優しく微笑んでいる——

——ガングレド、行こうっ。お前と一緒にこの戦いを終わらせるっ。

（……はい、一緒に……どこまでも）

僅かに動く左腕で機体を動かしながら、やがて通路がすばまっていくのを感じる。

ガンガンと装甲が壁にぶつかり、やがて目の前の通路がすばまると共に周囲が開けるのを感じる。

周りには重たい重低音と共に僅かにイオン臭が漂う。

そして感じる激しい電気の感触。

血に汚れた黒い体毛がびりびりと逆立つ。

ここが——

（……隊長……私はあなたが好きです……大好きです）

——俺もだよガングレド。

(……よかった……本当に……ほんとうに)

——そして、最後のボタンをガングレドは押す。
ピツと短い音。

カウントダウンがモニターに走り、オルフェトが崩れ落ちるままに背後から飛んでくる弾を受けその場に蹲る。

弾幕は背中に重たい衝撃を与え、鈍い痛みと共に下半身が千切れたのを感じる。

やがて心臓すらも止まるだろう。

それでも、仲間の為にそして——

『——友の為に……』

操作マニユーバから離し、ゆっくりとヘッドマウントディスプレイを外し、黒き狼は天井を見上げる。

暗く狭い天井の向こう、瞼の裏に銀の狼の微笑みを浮かべる。

そして優しく手を差し伸べる——

(隊長……私は……あなたを愛しています)

そして黒き狼はつられて不器用な笑みを見せた。

(だから……)

——カウントダウンが終了する。

(生きて——)

ドームの施設天井を貫く程に大きな爆発が起きる。

宵闇を引き裂くほどの大きな爆発に、山頂付近に待機していた三機のオルフェトは巨大な砲台を向ける。

トリガーに指を掛ける——

『……ピーター……副長……死んじゃったの?』

『撃て!』

『でもお!』

『戦いを長引かせて皆を殺したいのか、早く終わらせないと皆死ぬんだよ撃てえ!』

『……くそおお、ピーター!』

『各員へ!高エネルギー砲を発射する、全機後退、繰り返す全機後

退しろおおおお！』

『撃つぞ！』

『撃てえ！』

『——ゴールドチーム、撃ちます……！』

闇を引き裂き進む光の奔流。

周囲の木々を吹き飛ばし、土を挟るままに砲塔から噴き上がる三つの高エネルギー砲は一つに集まってドーム施設へと迫る。

——真つ二つに引き裂くままに貫く鋭い光の柱。

反対側へと細い射線が通るままに、土煙がキノコ雲を作り、大きな爆発が海を波立たせ噴き上がった。

衝撃が周囲のエルザを飲み込み、後退しながらシールドを張るオルフェト部隊へと迫る。

そして巨大な爆発の中へとドーム状の施設が完全に崩壊し、消滅する。

ガングレドの機体と共に——

『エネルギー………尽きます』

細くなつていく火線。

溶け切った砲台から身体を離し、四機の黒いオルフェトは踵を返すままに暗い山を下りていく。

『………』

『戻るぞ………泣くのは終わってからだ』

『うん………うん………』

『僕らが……僕らがちゃんとしていれば………』

『——隊長がちゃんとしてくれる………隊長が………隊長が………！』

『隊長……お兄ちゃん………お兄ちゃん………！』

すすり泣く声が闇の中に響いた。

翌日、正式な通達として、旗艦アストライアに乗る全獣人に伝えられた。

ガングレドが亡くなったと——

十七話目

夕焼けの続く午後六時。

「……ごめんね、気づけなくて」

彼女を家に送り届け彼女の家に入って気がついたのが、拓斗の部屋の荒れようだった。

写真は全て破られていた。

残っているものは、僕と彼女の顔が割り貫かれていた。拓斗一人だけが映る写真しか残っていなかった。

この部屋で、彼はずっと孤独に生きてきた――

「……ごめんね」

僕はそう呟き、彼女の眠る自室へと足を運んだ。
綺麗な部屋だ。

ピンクや白を基調にしたカーテンやベッドカバー、机やマットなんかがあってそれでいてどれも綺麗で気品みたいなのがあった。

そんな部屋で、彼女はベッドに横たわっていた。

眠る姿はいつもと変わりなく、分厚い布団に身体を覆ったまま、仰向けのまま静かに目を閉じていた。

白い肌がカーテンの隙間から零れる夕焼けの光に照らされ赤らむ。今にも、目を開けておきそうだった。

優しい声が聞こえてきそうだった。

大好きな、彼女の声が――

――夕君、おはようっ。ほらっ学校行こうっ。

「……ごめんね」

僕はずっと眠る彼女を見下ろし、僅かに笑った。
もそもぞと布団の下で何かが蠢く。

代謝活動を止めた骸である身体すらも関係なく、あの化け物への変化は彼女に起き始めようとしている。

死者すらも鞭打つ力。

それほどまでに、何かが世界へと浸食を始めている――

「……行ってくるよ」

僕は踵を返し、変異する彼女を横目に部屋を後にした。

カツリカツリと鋭く伸びた足の爪が床を叩き、長い手の爪が壁をなぞるのが滲んだ視界に映る。

僕の姿も、化け物になってしまったのがわかる。
構わない。

この変異を止めよう。

こんなことを終わらせないと。

その為に、出来うる限りのことをしよう。

僕は彼女の家を出ると、夕焼けに目を細め、遠くと回の中心にそびえる巨大なビル、東京都庁へと目指した。

紅い光の玉が宙に浮かんで、バチバチと空を染めていく。

あの場所に多分何かあるのだろう。

バイクは運転した事がなく、車当然なく、辺りを見れば自転車はなく、電車は止まっているだろうし、移動手段は皆無だ。

――なら、歩いていこう。

なんとしても、あの場所にたどり着かないと。

止めないと。

僕はあの場所まで歩いた。

紅い炎を灯す空の下、大きな都庁ビルを目指して、僕はゆっくりと歩いて行った。

三年前の話だった。

暗闇の中に並ぶ試験管。

「……すごいでしょ。これ」

透き通った床の下、敷き詰められた大型の試験管には大量の食塩水が注ぎ込まれ、その中に小さな肉の塊が浮かんでいた。

それは、小さな心臓。

それ以外に胃、うねる小腸、大腸、など基礎的な消化器官から脳、肺などの心肺器官が一つ一つ、試験管に入れられていた。

それ以外には毛深い獣人の腕、足などが個別に試験管に収められ保存されているのが、細めた紅い瞳に映った。

深いため息と共に垂れる尖った耳。

アストライア艦内、特別実験室、ミアの個人研究室内に立ちながら、ユウは苦い面持ちで辺りに漂う、人の欠片を見渡していた。

「……悪趣味だな」

「見る分にはね。……これ、誰のものだと思う？」

「実験用——俺か……」

「正解。君以外の細胞は取らなかったからね」

「ぞつとしない物言いだ……」

そう言うのは、後ろに立っていた黒い狼のガングレド。

自分の分身がすぐ傍で漂っている感覚に眉をひそめながら、銀の狼は奥へと歩いていく少女の背中を追いかけた。

そして薄暗い廊下を抜け、やがて小さな書斎へと足を運ぶ。

そこは比較的広い部屋。

書籍がびっしりと詰められた戸棚がいくつも並び、ベッドの上にも半開きの本が散らかっていて、床は足の踏み場がないように思えた。

ペタンと垂れる尖った耳。

ガングレドはむず痒そうに鼻先を手で覆い、銀の狼は呆れた面持ちで肩をすくめると後ろに立つ副官に告げた。

「ガングレド、外で待っていて構わないぞ」

「い、いえ……くしゅっ」

「まったく……」

小さなくしゃみをしながら、後からついてくる黒い狼にユウは小さく肩をすくめつつ、床に散らかる本を踏みつつ部屋に入った。

部屋の奥、机の上に腰を落としこちらを手招きする少女、ミアを見下ろしユウは首を傾げる。

その手には、食塩水を注ぎこまれた小さな試験管。

その中に漂うのは、光の粒子を放つ、蒼い鉱石。

優しく微笑むままに、少女は散らかったベッドに座る銀の狼を横目に、光の鉱石を覗き唇を僅かに開いた。

「……さて、少しばかりの研究を見てもらったけど、どうかな？」

「さっきの俺の内蔵か？」

「ん」

「——俺の身体だった」

「正解。あれはね、ユウの身体の細胞を一欠けら貰って細胞を増殖させて作ったものなんだ。

あれはね、ユウの遺伝子設計図を基に作っているんだ」

「隊長の身体は、獣人のソレと既になっているということか、ミアよ？」

そう言って壁にもたれかかりながら、尋ねるガングレドに、ミアは小さく首を振って見せた。

その反応に銀の狼はスウと紅い瞳を細め、怪訝そうに眉をひそめる。

「……何が違う」

「——多分、ユウも見てきたと思う、この変異、『異人』化は代謝的、生物学的な変化じゃないってことを」

「……」

「これみて」

そう言ってミアが壁のモニターへと手を添えると、大きなモニターに光が入り、ミアは机のリモコンに手を這わせた。

そこには複雑に絡む遺伝子構造が二つ、画面を二つに分け立体的

に映し出されていた。

それは、巨大な二頭の龍のようにも見え——ユウは二つの遺伝子構造映像を見つめるままに首を傾げた。

「一つは俺か？」

「もう一つは変異していない人間の死体から取ったもの。DNAの基礎構造を見せるところなる」

そう言っただけで構造化を作る一つの塊へと焦点が走り、それはさらに細かな塩基配列の組み合わせが浮かぶ。

どちらも、一緒のように思えた。

どちらも、見れば見る程、一緒のように——

「……まさか」

——少女は僅かに微笑む。

「どういう事です隊長？」

「——俺の遺伝子は、この体になっても変化していないと言う事だな、ミア」

苦々しく顔をしかめる銀の狼に、ガングレドはハッと目を見開き顔を上げると、血眼になって画面に視線を送った。

そこには、ほぼ同じに見える遺伝子構造が見える。

螺旋の塔が二つ、暗闇へと向かって伸びている——

「ど、どういう事だミア」

「君たちは『人間』だって言う事。生物学上、どんな姿になろうと、その姿は人間であることの証明だって言う事。

驚く事に、そこらへんの異人から取っても結果は同じだった」

「……」

「ユウ。君に聞こう。これは誰が間違っていると思う？ ぼくの研究結果？ それともこの遺伝子情報？ ぼくらの認識の変化？ ぼくらは君たちだけを『獣人』とみて他の人を『異人』とみて、その他の人達だけを『人間』とみている？」

これは何が間違っていると思う？」

少女はそう告げてほほ笑む。

ユウは俯いていた顔を上げ、鋭く細めた双眸をミアに注ぐままに、喉を鳴らし僅かに開いた口から声を漏らした。

「……認識じゃない。特定の人間の認識が突然、そこまで細やかに見分け変化するなら、それ相応に脳に変化があるし、遺伝子に相応の変化がある。」

お前は、その事を告げなかった——俺の脳に変化はなかったな

……」

「何一つ。君は常に『人間』のままだよ」

「——なら、答えは一つだ。……この遺伝子は『人間』のソレではなくなっている」

「……。本当に、君は頭がいい。惚れちゃいそうだよ……」

再び俯く銀の狼に、ミアは感嘆のため息と共にそう告げた。

と、ガングレドは怪訝そうに眉をひそめたま真首を傾げると、向かいのベッドで頂垂れる銀の狼に尋ねた。

「隊長……どういう事です。私には何が何やら……」

「——セルバンテスのドン・キホーテは知っているか？」

「え、ええ……名前ぐらいは」

戸惑う友人に、ユウは肩を震わせ小さな笑い声を含めると、静かに語った。

「難しい例を出すわけじゃない。……かつて騎士エル・キホーテは風の噂で耳にした邪悪な巨人がいるという場所に向かい彼らに戦いを挑んだ。」

だがその邪悪な巨人は、傍から見れば単なる風車小屋だった。にもかかわらず彼は戦いを挑み続けた」

「……彼の頭がおかしいとしか」

「だが当人の認識は風車小屋が邪悪な巨人だった。これが個人の認識という概念だ。これを世界という一人の個人に置き換えると、世界はこの肉の塊を『人間』とかつては呼び姿を与えていた。」

今は違う——もっともらしい説明は、まだはつきりとできないがな」

ミアはコクリと頷いて見せる。

「社会学的には再現世界とも言われている。……この遺伝子を我々、というより世界は『人間』だと与えていた。

だけどもそれは違う、この遺伝子は『獣人』であるという定義へと置き換わっているんだ。それだけじゃない、ありとあらゆる定義、証明、存在、認識、概念がまったく別の喪に置き換わっている——ありとあらゆるものが変異しているんだ。これは生物学的な変化ではなく世界そのものの定義の変異ともいえるね」

「故に死んだ人間も生きている人間同様に変異する……この変化は、この世界において内在的に起きたものではない。この定義は、こんな唐突に変化するものじゃないし、そもそもこちらの世界には存在しない。」

ミア……この変異は外圧的に起きたもの。……何かがこの世界の概念、認識そのものを変化させているな」

彼は静かにそう告げた。

ミアはギョツとするままに、感嘆のため息をつく、机から飛び降りて俯く銀の狼へと歩み寄った。

そして俯く彼の傍に座りその横顔を覗きこむ——

「……どこまで知ってるの？」

「……かつて再生技術で、変化前の細胞を使って美沙を蘇らせようとした。……だが出来たのは醜い化け物だった。

その時、これは生物的な変化ではなく、もっと高次の異変だと気付いた。世界そのものの概念、定義すら壊れていくほどの強い力だと」

「——かつて、こちらの世界にこんな定義は存在していなかった。……ただある日を境にこの定義が流入してきた。

うつん、そうじゃない。もっと大きなもの、世界そのものが別のものに置き換わるうとし始めた」

「あの日を境に——か……」

コクリと頷く銀の狼に、ガングレドは只管に首を傾げたまま二人

を見比べては眉をひそめる。

「隊長……どういう意味ですか？」

「ガングレド、単純な話だ。誰かが引いた図面を書き直して別の図面を引こうとしているんだ。」

ミア……この世界とは別の世界の概念、定義が流れ込んでいるんだな」

表情を強張らせ、ミアは静かに頷いた。

「世界を変えるには、同じエネルギーをもった存在、即ち別の世界の存在を以って為すって言う事。この世界とは全く別の定義、概念が存在する世界が、この世界の存在定義、概念認識を塗り替えているんだ。」

あの日、世界は別の世界へと繋がった。どんな因果かは分からない、研究なのか、それとも偶発的なのかは分からない。ただどあの日あの場所で世界は異世界への道を開いた」

「……だが、一つの椅子に二人は乗せられない」

「どちらかしか残らない——そんな状況下で力関係は直ぐに決まった。向こうの世界はこちらの世界を取り込もうと自動的に動き始めた。故にこの世界は今消滅の危機にある。今は人や物の概念の変異で留まっている。だけどやがて時間、空間の認識、街の景色、夕暮れの色、定義、概念、証明が全て向こう側のもの塗り替わるだろう。」

こちら側の世界の全てが、向こう側の世界の概念へと全て塗り替わろうとしている」

「うーん……よくわからんが……この世界が、ミアの言う別世界へと変異していると言う事……か。その副作用として、我々などが獣人、異人と変化している」

「お、うまくまとめたねえ。ガングレドさっすがあ」

「ありがとう……頭が痛い」

眉間を押さえる黒い狼に、ミアはクスクスと甲高い笑い声を上げると、隣で項垂れる銀の狼を見上げた。

そしてまた表情を強張らせ、彼を見つめる――

「塗り替わった世界はもう一つ世界に吸収される……その適応として、ユウはその姿に置き換わったんだ。異人はその適応の過程でバグが発生したんだ。君は既に、こちら側の人間ではなく、向こう側の人間の血を引いているんだ」

「魔法……俺のあの力も、向こう側のもの、か……」

「ユウは特別だけどね、だけど君だけでもこちら側になんない定義、『魔法』と呼ばれる概念が存在し、また行使できるのは、向こう側の世界の定理が適用されている証拠なんだ」

「……一つ聞こう」

「何？」

「――この変異は『適応』と言ったな」

「うん」

「適応できなかった存在はどうなる……？」

「消滅する」

「……」

「言ったよね世界は浸食されているって。……こちら側の世界は言葉通りいずれ消滅し、残った存在は向こう側の世界に立たないといけない。」

「この世界はいずれ消滅するんだユウ……故に適応、消滅しないためにこの世界の定義、概念、認識、そして世界そのものが、向こう側のソレへと適応しつつある」

「……出来なかったものは消滅」

「そうだよ。『人間』はこの先十年以内に、全て消滅する。それはコールドスリープに入ろうがなからうが関係ない。世界の消滅に伴いこの世界に所属する全ての存在が消えてなくなる」

「……」

「ガングレド。君なら多分ここまで聞いていたならわかるはずだ。この先どうするべきか」

そう言って目を向けるミアの視線に、ガングレドはムッと表情を

強張らせたまま、ややあつて俯くと目を閉じた。

そしてため息交じりに呟く。

「なるほど……お前が言うには、この先十年以内に『人間』は自動的に消滅する。故に我々は守りに徹しているだけで勝てる、と」

「そう。やがてカウントダウンで消える存在を敢えて殺しにかかる必要なんてないってこと。或いはそっちの方が死人も少なくなるかもしれない」

「——隊長……」

ガングレドは俯いていた顔を上げ、項垂れるユウを見下ろした。くすんだ赤い瞳は無言のまま全てを知っているかのような面持ちで足元を見下ろしたまま微動だにしない。

ただ小さなため息が僅かに続き、銀の狼はグツと拳を固めては、手の平を広げて覗きこむ。

命を帯びたように、空中を漂う無数の光の粒。

『魔法』と呼ばれた力の源であるこの光は、暖かく銀の体毛を白く照らし、紅く滲んだ眼にまるで蛍のように映る。

静かに音も無く、薄暗い部屋に光を灯す——

「……ミア」

「うん」

「——向こうの世界は、どんな世界だ？」

「……」

「お前は、向こうの人間なんだろう？」

「ばれるか……」

「匂いでわかる。……この世界とは別の匂いだ」

グツと光の粒を握りしめる毛深い掌。

メガネの奥に苦笑いを零す少女に、ユウは呆れたような表情を滲ませると顔を上げ薄暗い天井を見上げた。

そして紅い瞳を閉じ、瞼の裏に闇を浮かべ、息を吐き出す。

「ガングレド……」

「はい」

「この事は、他言無用だ——引き続き、組織は日本連邦軍との戦闘を続行する」

「隊長……」

戸惑うガングレド。

銀の狼は目を閉じ天井を見上げたまま、やがて力なく項垂れると、隣に座る少女を見下ろした。

表情を崩すことなく零れる微笑み。

ソツと毛深い手に小さな手を這わせるままに、スウと紅い瞳を細める少女にユウは眉をひそめた。

「ミア……どんな世界だ」

「平和だよ。ただあつちにゲートが出来て、僕が調査に出た。それだけ」

「浸食は……止まらないのか？」

「戻すことはできない——君の身体は、もうこの世界に所属していないからね」

「……皆も同じか」

「うん」

少女は静かに頷く。

ユウはミアから目を離し力なく項垂れ、そして自分の足元を見つめながら、ゆつくりと目を閉じる。

瞼の奥、思い浮かぶのは、あの夕焼け。

学校の屋上。

友達の笑い声。

そしてあの日の少女の笑顔。

静かに涙が頬を伝った。

狼は静かに目を開き、不安げにこちらを見つめる友を見上げた。

「——もしかしたら、向こう側に、俺達の信じる平和があるかもしれない」

「……。この世界を見捨てるのですか？」

「それもいいさ——ただ、この世界には皆思い出が多すぎる。…

…捨てるには、重たい場所だ。

残っている人達も、皆生きようとしている。世界も同じだ。俺はそんな彼らを出来る限り生かしたい」

「……和平ですか？」

「ダメだ。……一時的な和平を組んでも、いずれまた差別が始まる。我々の容姿は人が嫌悪する程に、その姿を変えた。

この身体が示す様にもはや、この世界に俺達の居場所はないだろう」

「……」

「ミア……この世界と向こう側を繋ぐ場所はどこだ？」

少女は小さく頷く。

「君も、よく知っている場所だと思う」

「——また、あの場所に行く事になるとはな」

その言葉にガングレドはハツとなるままに、壁にもたれかかっていた身体を起こした。

「隊長、もしや……」

「——どの道、あの場所に連邦の本部もある。目標は変わらない。向こう側に行った後追ってこられても困るしな」

「……。そうですね、どの道叩かなければいけない相手です」

「ガングレド……俺は都庁に向かおうと思う」

「はいっ」

「——手伝ってくれるか？」

「もちろん、貴方が望むままにっ」

「ありがとう……」

強く頷くガングレドに、銀の狼は小さく頭を下げ、申し訳なさそうに笑みを滲ませた。

——クイツと服を引っ張る小さな手。

振り返れば、そこには優しく微笑む少女。

「ユウ……一つ聞いていい？」

ペタンと耳を垂らし、狼は首をかしげていると、少女は静かに尋

ねた。

「君は、何のために戦うの？」

「……」

「なぜ、都庁を目指すの？」

——あの時、答えは出せなかった。

ただ黙りこくったまま、じっと見つめる少女の厚い視線から目を反らし、狼は小さなため息と共に項垂れるだけだった。

そして静かに目を閉じるだけだった。

「……ガングレド」

アストライア艦内。

そこはガングレドの部屋の中。

中は整頓したまま残っていて、机も綺麗に磨かれクローゼットにはいくつかの私服と軍服が飾られていた。

僅かにしみついた彼の匂いが突き出た鼻先を伝った。

彼が生きていた痕がしっかりとここに残っていた。

ベッドはシャツがきちんと畳まれ、上には出撃前まで着ていた軍服が綺麗に畳まれていた。

匂いが強く残っていて、今にも足音が聞こえてきそうだった。

黒い狼男が目の前に立っているかのようにだった——

「……」

本棚にはいくつか焼けのこった実用本とアルバム

そこには仲間と撮った写真が残っていて、いくつかは死んでしまった者達も写真の中に入っていた。

色々な場所を回った。

アストライアに乗り世界各地を回り、紛争を処理し、仲間を集め、

オルフェトに乗って敵と戦い続けた。

いつも一緒だった。

いつも、背中を支えられ、前線で戦い続けていた――

「……」

アルバムを閉じ、銀の狼は静かに戸棚に戻す。

フワリ……

長い尻尾を翻し、踵を返すままに、強く彼の匂いの残る部屋を後にしようと、狼は静かに床を蹴りあげる。

扉に手を掛け、自動で目の前の壁が開く――

「ユウッ」

――聞こえてくる甲高い声。

ヒクリ……

垂れていた耳が尖り、俯いていた顔を上げると、銀の狼は霞んだ視界の中、目の前に息を上げる少女を捉える。

苦しげに胸を押さえ上下する小さな肩。

メガネの奥、不安げに紅い瞳を見開くままに、少女は立ちつくす

銀の狼を見上げるなり安堵に笑みを零した。

「よかった……やっぱりここにいたんだ」

「ミア……」

「――ジークさんが呼んでる。新型機が搬送されたって」

「……。ミア」

「ん……」

「ガングレドは、死んだ……」

「うん……ゴールドチームのみんなから聞いた」

「――あのバカは……傷だらけの機体で施設に特攻して……」

「うん……」

「……。ミア、お前の言うとおりだ」

風に靡かせる長い尻尾。

コツリ……

静かな廊下に爪を擦らせ歩き出す銀の狼の背中を、少女は踵を返

すまみに慌てて小走りに追いかける。

そして小さく丸まった背中を見上げる――

「ユウ……」

「お前の言うとおり、防衛に専念していれば、こんなにも被害が出る事がなかったらう。」

それ以前に無茶をして二面作戦を行って……俺が一つに絞れば、こんなことにはならなかったかもしれない」

「……。仕方ないよ、少しでも急ぐ必要があった。この世界は今も浸食を受けている」

「……俺が……戦う事を選んだばかりに」

「――ユウ……」

「ん……」

「なんで、ユウは戦うの？」

ピタリと止まる脚。

大きな背中が丸まったまま止まり、ミアは同じく足を止めると、彼の隣へと回り込み狼頭の横顔を見上げる。

俯いて、澀んだ紅い瞳が見えた。

とても悲しげに口を開く横顔が見えた。

「……わからない」

「……」

「ただ――俺が許せないのは、戦う目的も曖昧なまま仲間を見殺しにした、ガングレドを見捨ててしまった……。」

なのに、なぜ俺は俺は生きているんだ……」

「……」

「俺は……」

――ギョツと毛深い手を握りしめる小さな手。

身体を引っ張る小さな力に、ユウは僅かに顔を上げると、両手で一生懸命腕を引っ張る栗毛の少女がいた。

汗を額に滲ませ、苦しげに顔を紅くして狼男の重たい身体を引っ張ろうとしていた。

「んんっ……ユウの身体重たいっ」

「ミア……」

「——行こうっ。ユウにぼくが作った機体を見てほしいっ」

少女はうつすらと汗を掻きながら、少し照れくさそうに微笑む。

そして、少し哀しげに俯く——

「ぼくは……基本研究者だし、あんまり大した励ましなんてできない。でもっ君に未来を見せることができるよっ。最高の図面を引いて最高の兵器を見せることができる」

「……未来」

「ガングレドは信じていたよ。君が進もうとした未来——皆が幸せになるって夢」

「……向こうに何かあると希望を持ったに過ぎない……」

「それでも、その為に突き進んだ君の背中を、多くの人達が見てきた。君がその為に一番前線で戦い敵を倒した姿を皆が見ていた」

「ただの欺瞞だ……俺は、ただ皆を守りたくて……」

「その先に、平和な未来がある。……皆と一緒に向こう側に行く、そう決めたんだよねっ。争いの果てではなく、新たな未来の光を信じて」

「俺のエゴだ。本当なら守るだけで済んだのに……俺は、仲間を殺した……」

「皆知ってるよ」

「え……」

——少女は惚ける。

ギョッ

狼の両手を掴んだまま少女は少し照れくさそうに笑うと、惚ける狼の身体をぐっと引っ張った。

カツリと床を叩く爪。

ヨロヨロと歩き出す大きな体を横目に、ミアはうつすらと汗を掻きユウの身体を引っ張って歩く。

そんな小さく、大きな背中を、紅い目を見開き狼は見下ろす——

「皆、何となくわかつてる。ユウが信じる未来。皆を守ろうとして
いる事、ユウの気持ち」

「……」

「そんな君だから、皆ついていく。命を賭けて無茶をする君を守る
うとする」

「——ミア……」

「ガングレドは……君を信じた。多分、最期まで……そして今もっ
すすり泣く声が微かに聞こえる。」

ギョッ

強く体毛に食い込む指は痛く、そして暖かく——銀の狼は俯き
ながら唇を僅かにかみしめた。

僅かに、声が口の端から洩れた。

「ぐっ……ひぐっ……」

「ユウ……ガングレドは自分を誇った、君の為に命を投げ出せる自
分を……誇りに思ったと思う」

「……ごめん……すまない……俺が……俺は……」

「君の後ろには皆がついていつている……皆君を信じてる」

「ガングレド……俺は……お前の為に何も……」

「——自分を信じて……君が歩いている道は険しく遠く闇が広が
り……でも必ず光があるから……」

「……ああ……ああ」

ユウは俯きながら何度も頷いた。

滲んだ視界に小さな少女の背中を捉えながら、丸めた背中を震わ
せ、それでもヨロヨロと廊下を歩く。

その向こうに広がる薄暗い闇を指し、彼女と共にゆっくりと歩
いていく——

「——ユウ。聞くな」

「……ああ」

「なんで、君は戦うの?」

ゆっくりと広がる紅く澄んだ瞳。

俯いていた顔を上げ、鼻先を擦り、狼の顔を強張らせ、銀の体毛を逆立て、垂れた耳が僅かに尖る。

キュツと力のこもる長い尻尾。

表情を強張らせ、濡れた目尻を拭い、銀の狼、ユウは顔を上げて闇の広がる廊下を見つめる。

グツと少女の手を握りしめる――

「俺は――」

握り返す、強い感触があった。

とても暖かった――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4601ba/>

黄昏のオオカミ—The Twilight of Xenoatla—

2012年1月13日16時47分発行